

## II グレゴワールの改作版 (FG) <sup>1\*</sup>

### 1. このグループの現在の構成

14 世紀の始めにフランスに持ち来られたフランク・イタリア語の今は失われた一写本が、そこでグレゴワール某によって一種の翻訳を受けた。すなわち、より正統なフランス語に書き直され、別種の文学型式にのっとりあちこち変えられたのである。この新たなテキストのオリジナルはこれまた失われたが、かなりの確実さでそれを復元するに十分な材料が今に残っている。確実にそれに遡る写本は、私の知るかぎり 15 である<sup>1)</sup>。これらはさらに異なる四つの下位グループに分けることができ、それを A、B、C、D と呼ぶことにする (グレゴワールによって作成された原本、あるいはそれから派生し我々の目にその代わりとなっていると映るこのグループ全体を指すには、G を用いる)。

**A<sup>1</sup>**. ——パリ国立図書館フランス語 5631<sup>2)</sup>。羊皮紙、20 x 30、87 葉、2 欄組み、十分に優美なフランス語字体、章の冒頭は交互に赤と紺の 2 色で丁寧の色付け、章題赤、番号付き、テキストの最初の 2 葉に二つだけだが凡庸な細密画あり。f.59 で転記者が代わり、f.71 で再び最初の者に戻っている。2 番目の写字生によって転記された部分では一欄 35 行、残りでは 36 行。千三百年代後半に属する。

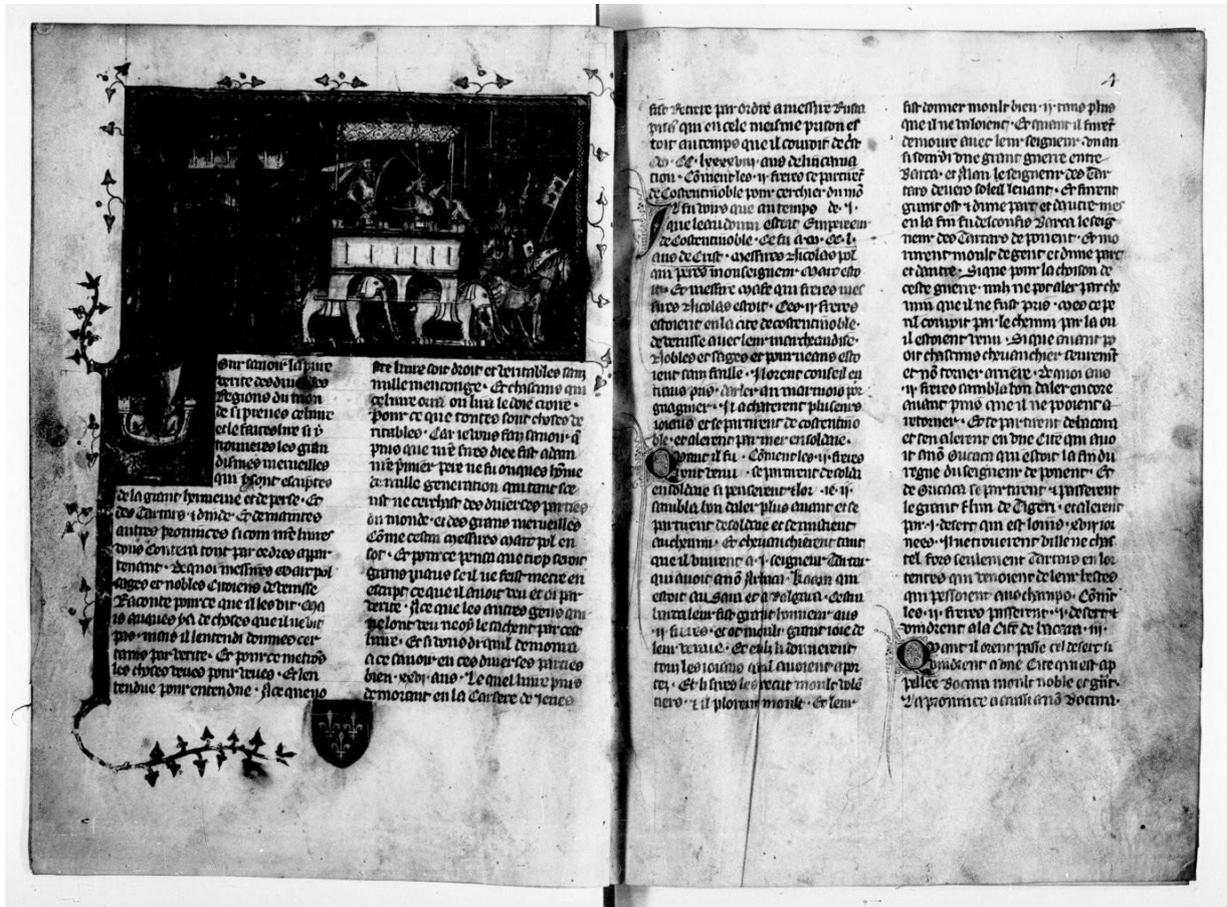
最初に見出しの目次がくる (ff.1a-3b)。f.1a: *Ci commencent les rebriches de cest livre qui est appellez le devisement du monde lequel ie Grigoires contrefais du livre de messier marc pol le meilleur citoien de Venisse creant crist.* 「世界の記と呼ばれる書の見出しここに始まる。本書は、クリストを信ずる最良のヴェニス市民マルク・ポール殿の書を、私グリゴワールが作り直した<sup>3)</sup>もので

ある」 f.3c テクストの始まり : Pour savoir la pure verite des diverses regions du monde si prenes ce livre et le faites lire. 「世界諸地の全き真実を知るためには、本書を手に取り読ませて下され」。 f. 87b: mais n'en fist nul semblant ains monstroït qu'il ne les doutroit riens pour conforter sa gent si comme sages hons qu'il estoit. 「しかし彼は少しもそう見えないどころか、現にそうである聡明な人間らしく、彼らを全く恐れていないことを示して兵を元気付けた」。

この写本は、ベリー公の図書館に収蔵されていた。最後の葉のテキストの後に、削り落とされてはいるけれどもなお公の署名と、「本書はベリー公所有になる」との書き込みを見分けることができる。公の蔵書目録にも記載されている。これからまた、別の時期に「真紅の革に刻印され、真鍮の二つの留め金で」さらに立派に装丁し直されたこと、1416年に「6リーヴル5ソル」の値が付けられたこと、ブルボンヌ公爵夫人に贈呈されたことが分かる。光に透かして見ると、f.3の下部にルイ・ド・ブルージュの紋章の痕跡がなお見分けられる。その紋章は、フランスの楯の青の下地に3本の金の百合によって覆われていた。

ポーチェが出版したマルコ・ポーロのテキストは、この A<sup>1</sup>の一刊本と見なすことができる<sup>2\*</sup>。他に二つの写本が考慮に入れられてはいるけれども、彼の基本テキストはこの fr.5631であった。

Fig.1 FA<sup>1</sup>:BNF fr.5631, ff.3v-4r (最初のページ)



Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France

A<sup>2</sup>. — パリ国立図書館フランス語 2810<sup>4)</sup>。大量の美しい細密画で研究者によく知られた著名な『驚異の書』*Livre des Merveilles*<sup>5)</sup>。大型四つ折り版、羊皮紙、298 x 420、297 葉。マルコ旅行記の他にオドリーコ、グリエルモ・ディ・ボルデンセレ、ジャン・ド・マンドヴィル、ハイトン、リコルド・ディ・モンテクローチェ、教皇ベネディクトゥス 12 世宛タルタル人のグラン・カンの書簡、カンパリクのキリスト教徒への同教皇の書簡、グラン・カンの諸国についてのジョヴァンニ・ディ・コルの報告を収める。つまり、1351 年にサン・ベルタン修道院のベネディクト会士ジャン・ル・ロン・ダ・

イプルによって編まれた東方旅行記集が、新たなテキストで増補されたものである。ポーロのテキストは最初の 96 葉を占める。1 欄組み、残りの部分同様稀有な美しさのアラベスク模様で豪華に縁取りされている。このポーロの書を飾る 84 の細密画は、芸術性と図像学的意義の点で同じレベルにはないが、私にはすべて同一人の手になるように見える。しかし作者は分からない<sup>6)</sup>。この素晴らしい書は、まずもっておそらくブルゴーニュのジャン豪胆公のために作られたものであろう。その楯の紋章がこの収集本の様々な部分の冒頭の大文字の中に繰り返され、かつては豪華な装丁がそれで飾られていたし、その紋章と肖像が f.226 の大きな細密画の中に認められる。1413 年に同公から、叔父にして代父だったジャン・ド・ベリーに贈られた。巻の冒頭にベリー公の執事ジャン・フラメルが、類い稀な優美な筆跡でもってその贈呈を記念する長い一文を掲げている：「本書はブルゴーニュ公ジャンが、ベリーとオーヴェルニュの公にして、ポワトー、エスタンペ、ブローニュ、オーヴェルニュの伯たるその叔父にしてフランス王の息ジャンに贈呈したものである」。贈呈の日付は、公の宝物管理人のロビネ・デスタンペによってその目録の一つに記されている：「本書は、前述ブルゴーニュの殿が 1412 年 1 月に前述の殿に贈呈した」。そのいくつかはまさしく絵画と言ってもよい「挿絵」の多さからして、この素晴らしい写本の製作はこの日付から何年も前に始まったに違いないことは明らかである。しかし、フィリップ大胆王にまで遡る必要はないであろう。

f.1 「マルク・ポルの驚異の書ここに始まる」。この最初の書き出しの後に細密画が一つあり、次いで二番目のより普通に見られる書き出しがくる：「マルク・ポルの、大アジアと大小インドと世界の諸地の驚異の書、ここに始まる。[後略、A<sup>1</sup>の始まりに同じ]」。f.96v: 「[前略、A<sup>1</sup>の終りに同じ]マルク・ポル殿、世界とそこなる驚異の記の書、ここに終わる」。目次はない。上に引用した文に含まれているタイトルが、フラメルによって次の書き込みの中に繰り返されている：「本書は世界の驚異、すなわち聖地、タルタル人の皇帝グラン・

カアン、インドの国々についての書である」。ゴスラン某——彼は千五百年代後半に王室図書館の係官だった——の二つのメモが、今度は保護紙に繰り返している:「六人の異なる著者を含む世界の驚異の書 etc」。

この書の最初の二人の所有者がどうだったかはすでに見た。ベリー公のいつもながらの蔵書票が最後についており、削り落とされているがまだ見える。彼の死にあたって作成された目録では、この作品は 125 リラ・トゥールーズ貨と評価された。その後——公の娘ボンヌ・ド・ベリーが 2 度目の結婚で城代家老ベルナルド・ダルマニャックに嫁いだため——その子孫の手に渡り、所有者の中に有名なジャック・ダルマナック、ヌムール公がおり、その楯の紋章と銘が同書のいくつかの個所に加えられているのが見られる。その悲劇的な最期（1477 年）の後、これがピエール・ド・ブルボンに渡り、そのコレクションがさらに後にフランソワ 1 世のとき王のコレクションにまとめられたのか、それともこの処刑者の他の財産とともに没収されて、その時からルイ 11 世の所有になっていたのかは分からない。ヌムール公が、ジャン・ド・ベリーの蔵書票の下に、自分の名前とともに、習慣であったごとく同書が送られた先の城の名も記しているため（その言葉は殺ぎ落とされているがまだ読める）、この『驚異の書』は、公が最後に滞在し、そこからバステューユの牢獄さらに絞首台へと移されたカルラ城の書籍の中に混じっていたことが分かる。

この fr.2810 はポーチェの版に用いられた。



Fig.2 FA<sup>2</sup> : BNF fr.2810, f.1r (最初のページ)

**A<sup>3</sup>**. ——パリ・アースナル図書館写本 3511<sup>7)</sup>。大型四つ折り版、羊皮紙、275 x 397、112 葉、うち最初と最後白紙。テキストは ff.2r-108r を占める。次いで 1 ページ白紙の後目次 (109r-111r) が続く。2 欄組み、各 32 行、見出しタイトル付き、章番号なし、冒頭赤とトルコブルーの地に金文字。テキストの最初の面は 3 分の 2 が、クブライの宮廷からのポーロ 2 兄弟の辞去を描いた細密画で占められている。書体は 15 世紀末か 16 世紀始めのもの。単なるコピーというよりは、何かずっと古い美しい写本のまさしく模造品といった感じを外観に漂わせている。この後世の複製がどのような愛書家用に製作されたのか明らかでない。写本が呈する最も古い所有の痕跡は、第 2 葉の余白を占めているアンヌ・マレ・ド・グラヴィユの楯の紋章と銘句である<sup>8)</sup>。しかし彼女はおそらく父親、グラヴィユの提督から相続したのであろう。彼は、後に見るようにマルコの書をもう一冊持っていたし、美しい書籍へのその関心はよく知られていた<sup>9)</sup>。背表紙に「世界の諸地」とのタイトルがある。

**f.2a** : 「世界の諸地の全き真実を知るためには、本書を手に取り、読むか読ませて下され」。 **f.108b** : 「その時以来別の不和が生じたことが知られるようになった。了」。

アンヌ・ド・グラヴィユの所有になる他の作品については、相続によってドゥルフェ家の著名なコレクションに入った後、その収集写本の少なからざる部分と同様に散逸を被ったことが知られる。この写本に付されている覚え書きは、様々なコレクションを経巡ったことを伝えるだけである。17 世紀始めにはラヴィーニュ某に所有され、彼は 1612 年 5 月 29 日「レーヌのエヴェシェのジロデにて」なる日付を 2 度記している。1703 年 3 月には——最初の保護紙のフーコーのメモから分かるとおり——「バイヨー教会僧院長にしてオルレアン公閣下の礼拝堂の師」ピブラクの僧院長からフーコーに贈られた。フーコーの楯が装丁に刻印されており、「枢密院委員ニコライ・ヨセフィ・フーコーの蔵書より」との蔵書表が残っている。最後に、現在所蔵されている図書館の創立者であったアルジェンソン

公の手に渡った。

**B<sup>1</sup>**.——大英博物館王室写本 19 D 1<sup>10)</sup>。大型四つ折り版、羊皮紙、267葉、ほぼもっぱら東方に関する様々な作品の雑録集。『アレクサンデル戦史』 *Historia de preliis* の翻訳、『アレクサンデルの復讐』 *Vengeance Alixandre* とともに、グラン・カアン宛イノケンティウス4世の使節の報告とオドリーコの作品、聖地渡航のための「手引き」、イスラエル史の断片がある。マルコの書は ff.58-135a を占める。私には、千三百年代後半のフランス人の筆跡と見える（この収集本の二つの文書、上述「手引き」とプリマの年代記の断片はジャン・ド・ヴィニエの訳であり、1333年以前ではありえない）。2欄組み、各45か46行、冒頭文字色付き、縁飾りと細密画付き。ポーロの話の前半を飾る無名氏の19の「挿絵」は、これも私にはフランス派のものと思えるが、この写本の日付とその由来をさらに正確に確定するための何ら決定的な要素を提供しない。第1葉と58葉の余白に描かれている紋章——金地に羽を広げた砂鷹——も、この高価な書物がそのために制作されたきつと貴顕と思われる人物を特定するには充分ではない。

f.58a「大アルメニア、ペルシア、タルタル人、インド、ならびに世界にある大いなる驚異について語るグラン・カアンの書、ここに始まる。世界の諸地の全き真実を知るためには、本書を手に取り、そこに書かれてある大いなる驚異をご覧下され」。f.135a「何度か男をまるで一羽の鳥であるかのごとく軽々と捕まえて父の前に連れて来たのだが、彼女はよくそうしたものだ。大都カンバルクのグラン・カアンについてと呼ばれる書、終り」。

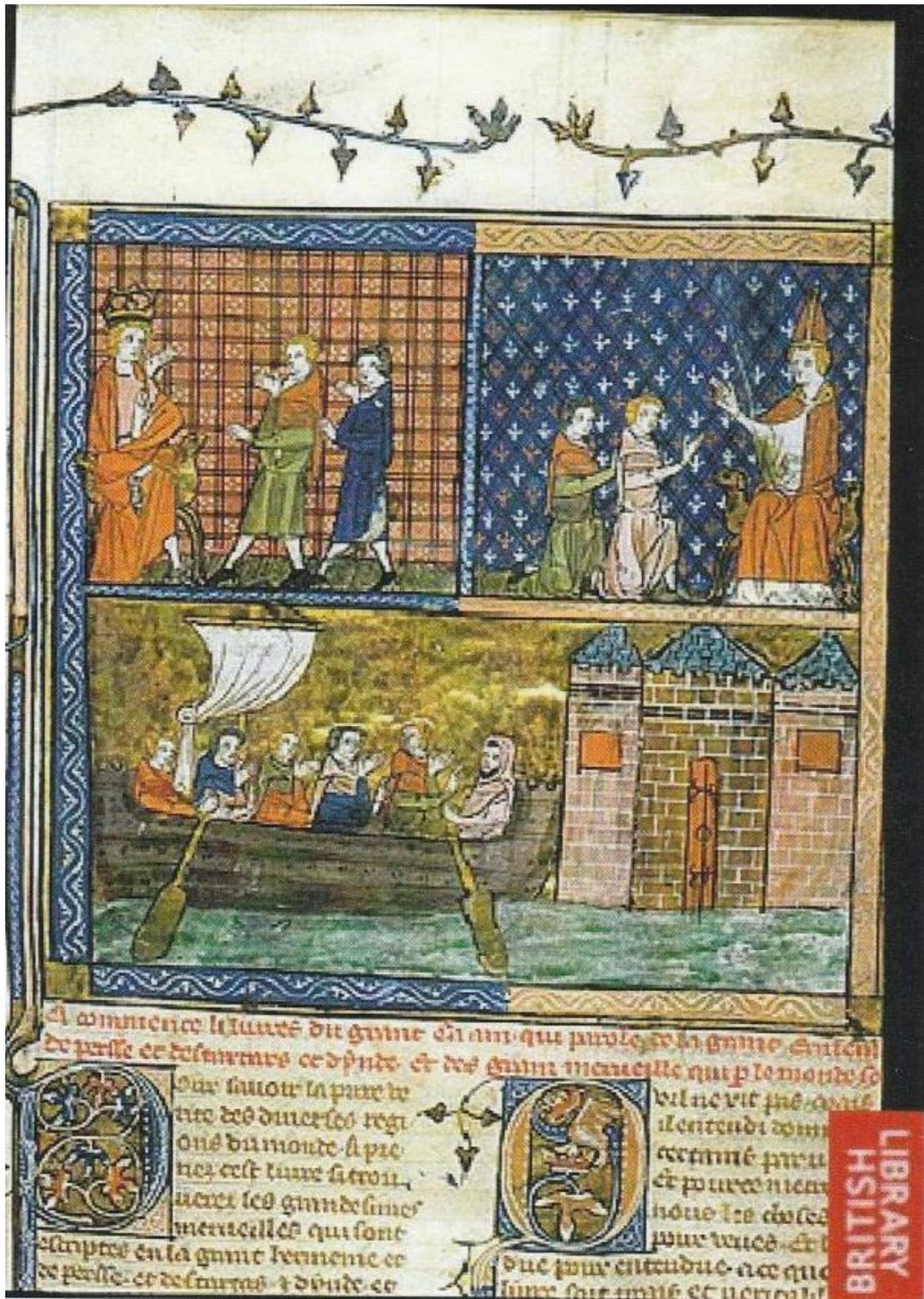


Fig.3 FB<sup>1</sup> : British Library Ms. 19D1, f.58r

**B<sup>2</sup>**. —オックスフォード・ボドリアン図書館ボドリアン写本 264 (バーナードのカタログの 2464) <sup>11)</sup>。合本された二つの素晴らしい写本からなる。筆跡と時期は異なるが、たとえ同一の工房から出たのでないとしても、祖国は確実に同じである。これらが一つにされたのは、前述の雑録集の場合と同じ基準による。マルコの東方の書が、オリエントの征服者アレクサンデルに関する一書に付け加えられているのである。前者は現状では ff.218-271v を占める。羊皮紙、大判(290 x 418)、2 欄組み各 46 行、タイトル、頭文字、縁飾り、細密画など、これら豪華版の個々の全ての特長において芸術の不変の喜びとオリジナリティを示す。38 の細密画の一つは署名がある：「ヨハンネスが私のために作った」。しかしこのデータだけでは確実な特定に充分でない。作品の日付は不明である。これの前にあり正確な日付(1338 年写字生の、1344 年細密画家の「了」)を備えた『アレクサンドレイド』Alessandreide より古くはないことは明らかで、オックスフォードの『マルコ・ポーロ』は 14 世紀最後の数十年を考えますが、断固として 15 世紀に置こうとする者もいる。制作は、フランスの影響は否定し難いが、フランス産と認めることはできない。多分フランドル、おそらく英国領で制作されたものであろう。

f.218 : [略、B<sup>1</sup>の始まりに同じ]。 f.271r : [略、B<sup>1</sup>の終りに同じ]。

保護紙と装丁の裏に様々な所有者の痕跡が残っている。エドワード 4 世の舅のものだったことがある。すなわち、「リシャール・ド・ウイドヴィユの閣下、リヴィエレの君主、いとも高貴なヤルティエ教団の団員の一人」で、「同君主は本書を恩寵の 1466 年の年初の日、いとも徳高きエリザベス女王戴冠の第 5 年聖モアの日の前日にロンドンにて入手した」。その後トーマス・スミス、ジャスパー・フィロル、「兵士」ジル・ストラングウェイズの名が続いている。ボドリアン図書館には 1598 年と 1605 年の間に入っているが、おそらくボドレー自身から寄贈されたものであろう。

The miniature depicts a bustling harbor scene. In the foreground, several large wooden sailing ships with multiple masts are docked at a quay. A white swan swims in the water. In the middle ground, a bridge with a central tower spans across the harbor. People are seen walking on the bridge and on the quay. In the background, a large, walled city with numerous towers and buildings is visible. The scene is set against a gold-leaf background. The entire miniature is enclosed within a decorative border featuring floral motifs and geometric patterns in blue, red, and gold.

**D**ur saoir la pure verite des diuerses regions du monde, si pieuz est liure si trouuerz les grans liures merueille qui sont escriptes en la grant herminee et de prite, et de tartas, et dynde et de manres autres prouinces, si comme uie liures nous conterat tout par ordre des que me lires mar, pl saies et nobles si toies de uenir saouit pour ce que il les ont, mais auques il y a choses.

**Q**u'il ne soit pas, mais il eueudi dou mes certains par uente. Et par ce metrons nous les choses veues pour veues. Et l'entendue par entendue ac que uie liure soit uais et nettes

bles sauz uie meucouge. Et chatais que ce liure on a ou liure de ce conre, pour ce que toutes sont choses ve ntables. Car le liure sauz a saoir que plus que uie liure dix fait adun le premier pere ne fu ouques de nul homme generacion qui tant eut ne crechait des diuerses parties du monde come ce liure sauz mar pol en sae et pour ce plus que ce liure grand mais se ce ne fait meue en elat ce que il auoit uie et oy par uie nte. Ac ce que l'autre grant que ne liure uie oie le ca chent par cest liure. Et si vous di qual ce nom a ce saoir, en ces diuerses parties bien, et vi, ans le quel liure plus que de uenir ac sa en la carter de geue fia reuait par oide par meue rasta pyla. Qui eual meimes palon estoit au temps que il couroit de cest, an. C. et xij. et xxij. anz de l'incarnacion.

Fig.4 FB<sup>2</sup>:OBL Ms. Bodl. 264, f.218r

B<sup>3</sup>. —ベルン市図書館写本 125<sup>12)</sup>。286 葉からなる広範な収集本で、マルコの書(ff.1-93r)に始まり、マンデヴィル、ハイトン、オドリーコ、ボルデンセレ、リコルド、グラン・カアンと教皇の書簡、G.ド・コルの報告等、お馴染みの東方ものを収める。このうち最後の五つはイプルの僧院長ジャン・ル・ロンの前述の翻訳にある。美しい羊皮紙四つ折り版、きちんとした丁寧な文字、2 欄組み、素晴らしい花模様の縁飾りつき（第 76 葉は上から下へほぼ半分切り取られているが、これはきつとこのアラベスクの素晴らしさのためであろう）。研究者はこれを 14 世紀に置くことで一致する。しかし私には、写字生も無名の装飾師も 15 世紀の前半に属すること疑いがないと思える。

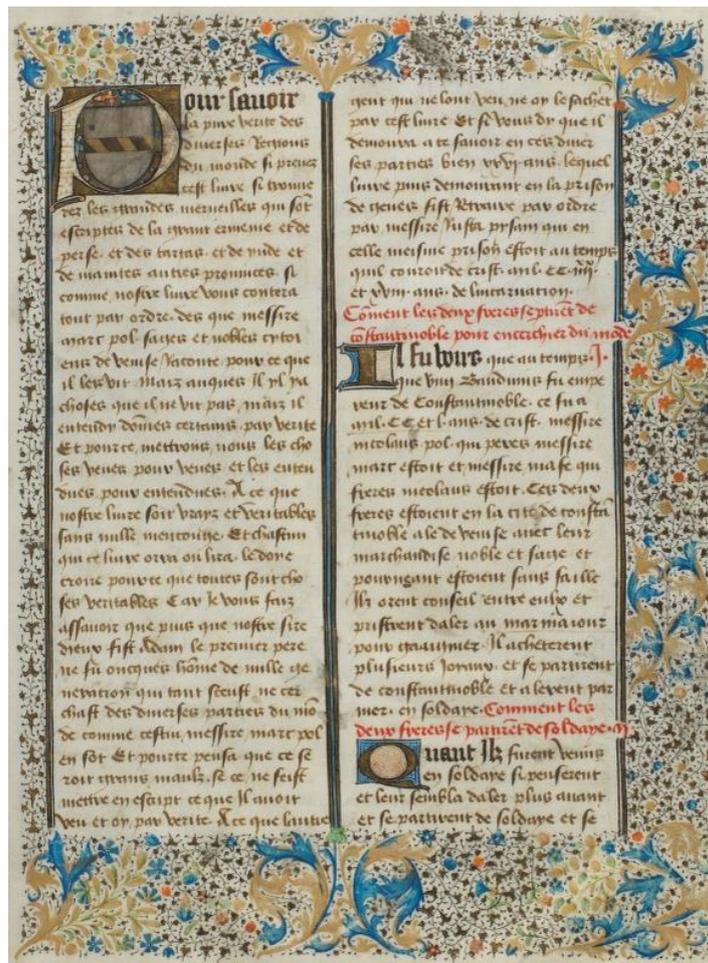


Fig.5 FB<sup>3</sup> : Bern, Burgerbibliothek, Cod. 125, f.4r (最初のページ)

最初の目次(1a-3d)は次のように始まる：「インドの地にある大いなる驚異を語るグラン・カアン、ここに始まる」。f.3d：[略、B<sup>1</sup>の始まりに同じ]。f.93：[略、B<sup>1</sup>の終りに同じ]。同じ筆跡で、次の声明が続く：

Veez cy le livre que Monseigneur Thybault chevalier seigneur de Cepoy que Dieux absoille requist que il en eust la coppie a messere Marc Pol bourgeois et habitant en la cite de Venise. Et le dit sire Marc Pol, comme tres honnorable et bien acoustume en pluseur regions et bien morigine et lui desirans que ce qu'il avoit veu fust sceu par l'univers monde et pour l'onneur et reverence de tres excellent et puissant prince Monseigneur Charles filz du Roy de France et conte de Valois, bailla et donna au dessusdit Seigneur de Cepoy la premiere coppie de son dit livre puis qu'il l'eut fait, et moult lui estoit agreables quant par si preudomme estoit avanciez et poetez es nobles parties de France. De la qualle coppie que le dit messere Tyebault sire de cepoy cy dessus nommez aporta en France, messier Jehan, qui fust son ainsne filz et qui est sires de Cepoy après son decres, bailla la premiere coppie de ce livre qui oncques fut faite puis que il fut apporte au Royaume de France a son terschier et redoubte seigneur Monseigneur de Valois. Et depuis en a il donne coppie a ses amis qui l'en ont requis. Et fu celle coppie baillee du dit sire Marc Pol au dit Seigneur de Cepoy quant il ala en Venise pour monseigneur de valoiz et pour madame l'Empereris sa fame vicaire general pour eulz deuz en toutes les parties de l'empire de Constantinoble. Et fut fait l'an de l'incarnacion seigneur Jhesu Crist mil trios cent et sept ou mois d'aoust.

**U**erz cy le liure. que monsr  
 Chybault. chenaier seigneur  
 de ce por que dieux absolle requist q  
 il en eust la copie. A messe marc pol.  
 d'ouyrou et habitant en la cite de  
 venise. et le dit Eric marc pol come  
 tres honnorable. et bien uouffime  
 en plu seurs seignour. et bien moussi  
 ne. Et lui desirant que ce qui auoit  
 deu. fust seu pay lumiers monde  
 et pour honneur et reuerence de tres  
 excellent et puissant prince. mon  
 seigneur Charles filz du roy de fran  
 ce et toute de valois. bailla et dona  
 au dessus dit seigneur de ce por. la  
 premiere copie de son dit liure pour  
 quil le ait fait et moult lui estoit  
 agreable. quant par si preudome  
 estoit auancie. et portez en nobles  
 parties de france. De laquelle copie  
 que ledit messe trebault sire de  
 ce por. cy dessus nommez aporta en  
 france messire Jehan qui fut son  
 ainse filz. et qui est sire de ce por.

Apres son deces. bailla la premiere cop  
 pie de ce liure qui oncques fu faite  
 puis que il fu aportez ou royaume  
 de france a son treschier et redoubte  
 seigneur mon seigneur de valois  
 et depuis en a il donne copie a ses  
 amis qui len ont requis. Et fut  
 celle copie bailee dudit Eric marc  
 pol. audit seigneur de ce por. quant  
 il ala en venise pour monseigneur  
 de valois. et pour ma dame lein  
 pereus sa femme. vicair general  
 pour eulz deus. en toutes les par  
 ties de lempire de constantino  
 ble. Ce fut fait lan. de lincarnati  
 on nostre seigneur ihesu crist.  
 mil. trois. cens. et sept. ou moiz  
 daoust.

Fig.6 ティボー・ド・セポワの声明 (Ms. Bern 125, ff.94rb-94va)

「この書は、セポワの君主騎士ティボー殿下が、神よ彼を赦し給わんことを、ヴェニス市のお方にして住人マルク・ポール殿に所望なされたコピーである。かのマルク・ポール殿は、いと誉れ高く、いくつかの地の風俗習慣にいたく通じた御方である。彼は、自ら目にしたことが全世界に知られるよう望み、またフランス王の息にしてヴァロワの伯、いとも優れて猛き皇子シャルル殿下に対する榮譽と崇敬のため、その作成後その書の最初のコピーを、上述セポワの君主に授け贈ったのであった。また彼は、かくも高貴のお方のためにフランスの貴き地に伝わりもたらされることを、大いに歓んだ。上にその名を揚げたセポワの君主ティボー殿下によりフランスに持ち来

たられたそのコピーから、その長子でありその死後セポワの君主となられたジャン殿下は、それがフランス王国に持ち来たられて後かつて作られた同書の最初のコピーを、そのいとも親愛なる畏れおおき君主、ヴァロワの殿下に与え給うた。その後彼はまた、それを所望する友人たちにそのコピーを与えた。このコピーがマルク・ポール殿から上述セポワの君主に贈られたのは、彼が、ヴァロア伯とその妃であるお后のために、コンスタンティノーブル帝国全土におけるこれらお二方の総代理としてヴェニスに赴いたときのことであった。これは、我らが主イエス・クリスト生誕一千三百七年八の月に作られた」<sup>13)</sup>

同書はジャック・ボンガール（1612年没）のコレクションの一部をなしていたことがあり、彼はメモを記している：「ボンガール、ド・シュペルヴィユ殿の好意により入手」。

ジンナーは、その『カタログ』中に導入部の伝記にまつわる章を再録している(pp.419-456)。

**B<sup>4</sup>**.—パリ国立図書館フランス語 5649 (旧 10270A)。羊皮紙136葉からなり、うち最初の2葉は現在AとBと記され、残りに1から134までの番号が振られている。最初の2枚と最後の3枚は白紙。最後の葉の状態からして、赤のモロッコ皮にフランスの楯の紋章の付いた今なおそのままの美しい装丁が施される前は、おそらくしばらく表紙の役割を果たしていたと考えられる。写字生は同書の末尾に自分の署名を記している：「ベルトラン・リシャールこれを書けり」(Cordier-Yule, II, 536にあるごとくピカールではない)。小型版(170 x 242)、1欄組み、ページ31行、半斜字体だがある種の優美さがなくもない、芸術的装飾はほとんどない。二つの大きなアラベスクが f.1r と f.5r の余白の二つの書き出し、つまり最初の目次とテキストそのものの書き出しを飾っている。そこの二つの冒頭文字は金地に大きく飾られている。章の他の冒頭文字は赤か紺でかすか

に色が付けられているが、おそらく写字生自身の仕事であろう。

f.1r : 「この書はセボワの君主騎士ティボー殿下が・・・」。以下、ほんのいくつか軽微な異なりはあるが、B<sup>3</sup>のところで引用した声明がそっくり続く。次いで赤でテキスト内の見出しとして：「インドの地にある大いなる驚異をここに語る」。さらに見出しの始まりが続く：「インドの地にある大いなる驚異を語るカタイのグラン・カアンの書、ここに始まる」。f.5v : [略、B<sup>1</sup>の始まりに同じ]。f.131v : [略、B<sup>1</sup>の終りに同じ]。

この稿本の作成者ベルトラン・リシャールは、長らくオルレアン公シャルルに仕えていた（もちろん 1452 年から 1461 年まで）。1454-5 年に公のために天文学の本とペトラルカのフランス語訳を転記している。1457 年には公爵夫人の一写本に公の歌謡をかなり挿入している。1460 年 1 月 23 日ブロワで、「前述の殿がロワニーの姫に贈ったバラードの本を書いたことにより」2 スクードの受領書を公の会計係に提出している。マルコの書のコピーもこの詩人の命により実行されたということもありえないことはない。最初の頭文字の中に、フランス-オルレアンの紋章が描かれている。

シャルル公の蔵書の今に伝わるリストの中に見当たらないことからして、ほとんどすぐに彼の兄弟、アングレーム伯ジャン・ドルレアンの手に渡ったにちがいない。ジャンの死（1467 年）に際して作成された二つの目録に記載されている：「羊皮紙、通常文字、グラン・カアンの物語、第 3 葉 *Ci nous devise* <ここに記す>と始まり、最後の葉に赤字で *scripsit hoc* <これを書けり>に終わる」。この詳細から、まずもって確実に現フランス語写本 5649 と同定することができる。二つの目録の一つはこれを欠本としている：「同様にジャン・ギーに贈呈された」。しかし、ジャン・ギーに贈呈された書はジャンの息子シャルル・ド・アングレームの手に渡ったことが文脈から分かる。最後の葉の中央に記されている署名「シャルル」は、おそらくこの息子のものであろう。

この稿本は、トロサの大司教シャルル・ド・モンシャル、そして

レームの大司教モーリス・ル・テイェに所有されていた。第1葉上部にこれら二つのコレクションにあった番号がまだ残っている。ル・テイェから王立図書館に寄贈された。

これは、ポーチェの版に用いられた。

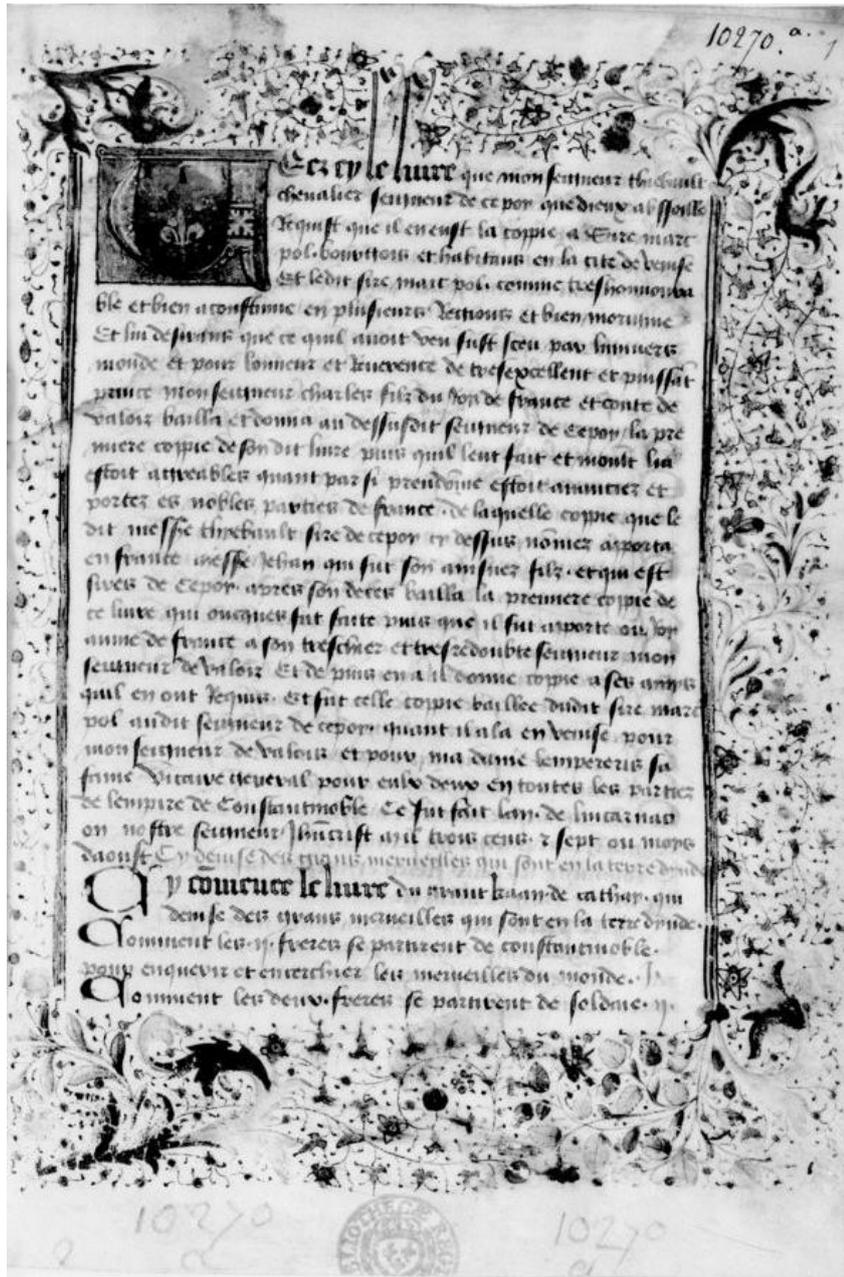


Fig.7 FB4:BNF fr.5649, f.1r (最初のページ)

**B<sup>5</sup>**. — ジュネーヴ大学公共図書館フランス語 154<sup>14</sup>。美しい紙写本、おそらく 15 世紀、21 x 29、外側は赤い革内側は羊皮紙が張られた板の装丁。明らかに欠落があるが、同じグループの稿本と対照すると 1 枚だけである。紙は近代の筆跡で番号が振られ、現状では 164 枚。1 欄組み、頭文字赤、字体良好。

前掲 **B<sup>3</sup>** の声明とともに始まる：[略]。Cc.1v-7r に章目次。テキストの始まり：[略、**B<sup>1</sup>** の始まりに同じ]。結び：「双方宮殿の広場に登場すると、互いに腕を掴み、取っ組み合い、あちこち打ち合いして、この闘いは長く続いたが、一方が勝利を占めることはできなかった」。

ポーロのどの研究者にも知られていなかった。

**B<sup>6</sup>**. — パリ国立図書館フランス語 Nouv. Acq. 934。1897 年に「フランス語古写本断片集」のタイトルで編まれ、様々な由来の切れ端から構成される収集の一部をなすマルコの書の一連の断片。哀れな状態になった 11 のかけら、明らかにカヴァーとして用いられていたいくつかの紙の残り、外側になっていた部分では古い折り目の痕が残ったところは全く、あるいはほとんど読めない。いたるところに裂け・黒ずみ・色あせ・穴あきあり。綺麗な羊皮紙写本の残り、私見によれば千三百年代後半の作、20 x 29、2 欄組み各 40 行、フランス人の筆跡、タイトル赤、番号付き、頭文字色付き、ある種の美しさのある絵付き、長い線の折り返しで飾られている。余白により後代の筆跡の書き込みあり。

ポーロの研究者に知られていない。

**B<sup>7</sup>**. — パリ国立図書館 Nouv. Acq. Lat. 1529<sup>15</sup>。ラテン語およびフランス語の古い断片と記録の収集本の第 4 番。2 葉だけからなり、1883 年に寄贈されたもので、ぼぼまずカヴァーとして用いられていた。第 1 葉表と第 2 葉裏は大部分読めないが、内側はいくぶん明瞭である。美しい羊皮紙本の残り、14 世紀、2 欄組み、各 30 行、

タイトル赤、頭文字色付き。現状では 176 x 275 だが、余白は大きく切り取られている。

C<sup>1</sup>.—ストックホルム王立図書館写本 XXXVII。小型四つ折り版羊皮紙、100 葉、1 欄組み、ページ 32 行、タイトル赤、番号付き、筆跡良好、確実に千三百年代前半のもの。章の大きな頭文字は第 XVI 章の後中断されている。ごく新しい筆跡で余白にいくつか注記があり、最後の葉の裏に世界地図付きで宇宙についての考察がある。

書き出し：「世界の諸地の全き真実を知るためには、本書を読むか読ませて下され、さすればそこに書かれてある大いなる驚異をご覧になれましょう」。結び：「アルゴンが我が兄弟アバガの息子だというのはそのとおりである。もし誰かが彼に言ったなら」。

第 2 葉が **Bocata mult grant** <とても大きなボカータ [ブカーラ]>、最後の葉が **iluec dist** <そう彼は言った> で始まることからして、1411 年のルーヴルの書籍カタログに次のように書かれているものと同一視される：「マルクス・パウルス、挿絵なし、フランス語、楷書体、第 2 葉 **vocata moult grant** に始まり、最後の葉は **ilec dist-il** に始まる、白い革のカヴァー、二つの真鍮の留め金付き」。1411 年にこのように記載された本は——1413 年と 1424 年の王立図書館目録にもやはり現れるが——シャルル 5 世がその統治の最初に所有していた 5 本の「マルコ」ものの一つであった。同書は、1424 年以後はベドフォード公の所有に帰し、フランスとイギリスに分散したルーヴル図書館の書籍の多くと同じ運命をたどったにちがいない。同書のその後の転変については、書自体にいくらか情報がある。最後の葉の表、上に引用した「結び」のすぐ後に、「オヌフルに住むシモン・デュ・ソリエのために」と書かれている。オンフル市古文書館に提出された 1499 年 11 月 17 日の公文書に、シモン・デュ・スリエが市の‘平民’と住民の検察官—市長として現れる。第 1 葉の署名 **Pa. Petavius** は、これがどうしてスウェーデンに至ったかを説明してくれる。パオロ・ペタウによって収集された後、息子アレクサ

ンデルによって売却され、スウェーデン女王の図書館の宝物を豊にすることになったのである。王冠と王国を捨てたとき、女王がこれを持ち去らなかったとすれば、それはおそらく自分用の図書の中にすでにもう一本の「マルコ」、多分これよりは著しく古くはないが美術的観点からはこれに劣らず魅力的なもう一本があったからであろう。すなわち、今ヴァチカン図書館にある Regina 1846 である。

ノルデンスキョルドは、1882 年にこれの素晴らしい写真複製を 200 部作らせている。

**C<sup>2</sup>**.—パリ国立図書館フランス語 Nouv. Acq. 1880。紙、180 x 255、149 葉番号付き、うち最初白紙、字体乱雑で不揃い、確実に非専門写字生、頭文字は別の筆跡、これもごく凡庸。15 世紀末か 16 世紀始め。

f.2r: [略、C<sup>1</sup>の始まりに同じ]。f.149v: [略、C<sup>1</sup>の終りに同じ]。

A<sup>3</sup>と同じく、この写本はアンヌ・ド・グラヴィユの所有になっていた。F.1v に「故將軍閣下の相続人アンヌ・ド・グラヴィユに、518 年」とある。その後ドゥルフェ家の図書館に収められた。ドゥルフェ家の楯の紋章が装丁に刻印されている。1870 年国立図書館に購入された。

**C<sup>3</sup>**.—アルスナル図書館写本 5219<sup>16)</sup>。美しい羊皮紙本、206 x 298、170 葉、うち最初と最後白紙（第 2 葉から始まって最後から 2 枚目までに鉛筆で新たな番号が振られている）。保護紙の後の最初の 8 葉は別の作品のプロローグによって占められているが、その本文はない（フランスのごく初期の歴史に関する古い文書の訳）。次のように題されている：「翻訳者、神学の修行を積んだ学生ロベール・フレシェール師による本書の序文」。これがため、マルタンはその「カタログ」中に次のように書いた：「ロベール・フレシェール訳マルコ・ポーロ旅行記」。しかし、この序文とポーロのテキストとの間には何の関係もない。ロベール・フレシェールは、文学活動に関しては私

に分かったわずかなことによるかぎり、16世紀の始めに属する。彼の作品がそのために作成されたごく狭い範囲を越えることはありえなかったであろうと思えることからして、このフレッシュールとマルコ・ポーロのなんとも奇妙でももちろん偶然の同じ一つの写本への組み合わせは、そのモデルがルイーザ・ディ・サヴォイアかその‘取り巻き’の誰かの図書館から由来したことがありえると考えられる。このロベール、「芸術の師にして優秀な神学生」は、アングレーム家の親族の一員であった。

各ページ1欄組み、丁寧な筆跡、頭文字はとても綺麗な金と色付き、ほとんどどのページにも1枚かときに2枚の細密画。細密画は全部で197(大きさは大部分葉の約3分の1)、技術的な差はさほどない、画想はいささか素朴だが、しかし何らかの注目に値する。

書き出し:[略、C<sup>1</sup>の始まりにほぼ同じ]。結び:[略、C<sup>1</sup>の終りに同じ]。

C.A.ピカールの蔵書に属していた。ピカールの写本のかなりが、マルコの別の一本の所有者であることをすでに見た N.J.フーコーのコレクションから来ていることからして、この写本もその収集に属していた可能性もある。1780年に489リラ19シリングでポールミー男爵に購入された。

C<sup>4</sup>.——ヴヴィー市博物館蔵の断片。千五百年代末の一帳簿の装丁に用いられていた羊皮紙2葉のみ。したがって現状ではとても痛んでいるが、千三百年代のきちんとしたゴシック文字や章の冒頭の赤の大文字や規則的な行取り(ページ26行)に、ある種の古い優美さの痕跡を見せている。サイズは小型、155 x 200、各章タイトルと番号付き。

1901年にミュレによって出版された。<sup>17)</sup>

D.——ブリュクセル王立図書館写本9309。羊皮紙、おそらく14世紀半ば頃作、マルコの書(ff.1-76)の他に『プレーテ・ジャンニの

書簡』 *Lettera del Prete Gianni* をも含み、巻の最後に第 CCI 章として付け加えられている。略字を多用した極めて密な筆跡や装飾の極度の少なさが示しているごとく、明らかに誰か学者用であろう。頭文字は装飾され、最初の頭文字の中に囲まれて、風景を背景に白い髭の老人を描いた唯一の細密画がある。渦巻き模様の中に、*Lizies ou livre sire Marc Pol* <マルク・ポール殿の書を読まれたし>とある。

章目次の前に：「イエスキリストを信仰するヴェニス市民マルク・ポール殿の書と呼ばれる全見出しの一覧、ここに始まる。本書には世界のいくつかの地域の沢山の大きな驚異が章ごとに順を追って述べられ収められている」。テキストの始まり：[略、B<sup>1</sup>の始まりに同じ]。終り：「かのアルゴンは、当然その権利があることとて、統治すべく全軍を率いて自分の国に帰った。マーク・ポール殿の書終わり。プレトル・ジャンからローマ皇帝フェデルク[フェデリーコ]宛の、彼が求めたとおりその国の有様について述べる書簡の内容が続く」。

15 世紀には同書はすでにブルゴーニュ公の図書館に入っていた。目録には、「マルク・ポール殿の書と題された赤い革の装丁のもう一書、第 2 葉は図版の後 *quant les deux freres furent* <二人の兄弟が・・た時>、最後の葉は *et chatiez* と始まる」と記載されている。これは、今我々が取り上げている稿本であること疑いない。第 2 葉と最後の葉はまさにそのとおり始まっている(カタログの *et chatiez* は、もちろん我々のテキストにあるごとく *et sachiez* <またご存じありたい>の誤り)。

カタログには、今なお所蔵されているこれとは別の写本として、「赤い革の装丁のもう一つの大型本、真鍮の二つの留め金、挿絵入り、タイトル<マルク・ポール殿の書>、第 2 葉に *quant les deux freres furent* と始まり、最後の葉は *se vous garde qui vit et regne sans fin amen* <誰が勝ち常しえに治めているか御覧になれば、アーメン>と終わる」が挙げられている。<挿絵入り>というが、<挿絵>と呼べるほどの飾りは一つしかないことからして、確かに我々の D とは合っていない。しかし、二つの写本が第 2 葉の最初の言葉

と最後の葉の最後の言葉が同一だとすれば極めて珍しい例であろう。すでに述べたごとく、マルコのテキストにプレット・ジャンの書簡が続いている稿本 9309 は、全体の最後はまさしく上と同じ言葉で終わっている：「誰が勝ち常しえに治めているか御覧になれば、アーメン」。同じ写本であることは間違いない。

Ms. 9309 にはパリ国立図書館の印が捺してある。1746 年と 1794 年の二度にわたってベルギーの写本がフランスによって持ち去られ、その後 1769 年と 1815 年に返還されたことは知られるとおりである。

## 2. 同定されないあるいは失われた写本についての証言

上に挙げた写本は、もっとはるかに広範に普及していたうちの生き残ったものの痕跡にすぎない。

ブルゴーニュ伯爵夫人マオーは 1312 年にマルコの書の豪華版を作らせている。「グラン・カンの物語を書き訂正するためと羊皮紙のために、エスダンの 3 人の書き手に 39 ポンド。その物語に挿絵を描き磨くためと、カヴァーのために 3 ポンド 4 ペンス」支払われたことが、その年の「館の勘定書き」から分かる。その 4 年後アルトワの同盟軍がエスダンの城に侵入して美しい書籍や宝石を押収した時、その中に「グラン・カンの生涯の物語」もあった。

書物を愛し読書家だったマオーは、マルコを読むことに最も生き生きとした興味を覚えていたにちがいない。明らかにその影響であろう、彼女が信頼を置いていた人物、アラスの司教ティエリー・デイルソンも同書のコピーを所望し、1315 年にウォン・ル・メロニューールに「グラン・カンを書き記す労に対して 38 ポンド」支出している。<sup>18)</sup>

シャルル 5 世が統治の初期にルーヴルの城の塔の一つに集めた素晴らしいコレクションの中に、マルコの稿本が五つあったこと、その一本が今に伝わる写本の一つ C<sup>1</sup> と同定しうることはすでに述べた。残りの四つについては、ずっと早くからいかなる痕跡も失われ、

様々な目録に繰り返されているごく微かな記録しか残っていない。

3 \*

ベリー公所有になる書の中に、前述した二つ（A<sup>1</sup>とA<sup>2</sup>）の他に  
もう一本ポーロの作品のあったことが知られる：「<聖地、グラン・  
カン、インド、タルタリアの世界の驚異>と題されたフランス語本。  
ブロック体で書かれ、最初と数箇所挿絵。第2葉の書き出し *poys  
de bonne citez* <いくつかの立派な都市>。刻印のある赤い革のカ  
ヴァー、二つの留め金と絹布。同書はこれの後に書かれているミサ  
典書とともに閣下がパリ在住の書籍商ルノー・ド・モンテ師より  
1412年10月に購入したものである。両書合わせて計100エキュで  
あった」。そしてロビネの覚え書きから、その本がパリ‘奉行’ピエ  
ール・デゼサールに贈呈されたことが分かる。これは、マルコ・ポ  
ーロの書そのものかそれともマルコの作品を含む文選集であろう  
（引用されている第2葉の書き出しは、記載者の読み誤りでなけれ  
ば、私の知る限りのポーロのテキストのどれとも対応しない）。

1477年、「ディジョンのブルゴーニュ館宝物庫の」シャルル豪胆  
公の書の中に、「マルク・ポルと呼ばれる」一書があった。この稿本  
も、我々のDと同一視すべきか、それとも別の一写本のことであろ  
うか。

コニャック城の図書館にはシャルル・ダングレーム死亡時に二つ、  
「フランス語版世界の驚異の書、羊皮紙に手書き、真紅のビロード  
のカヴァー、二つの留め金、一つは前述の殿（つまりシャルル伯）  
の楯の紋章、もう一つは前述妃殿下（つまりルイーズ・ド・サヴォ  
イア）の楯の紋章入り」と「インドの書もしくはグラン・カンの書  
と呼ばれる一書、羊皮紙手書き、金糸の布カヴァー」があった。こ  
れらにマルコの稿本を認めることができるが、肝心のデータが欠け  
ているため、前に挙げた写本のどれかと確実に同定することは不可  
能である。

1544年のブロワの書店の目録には次のものが記載されている：  
「羊皮紙に黒のビロードカヴァーのもう一書、挿絵入り、内にく新

たに発見された島々についてのヴェニス人マルク・ポールの書へのタイトル」。これがどれに当たるのか私には特定できない。この奇妙なタイトルは、いずれにしても何らかの混乱か、あるいは少なくともアメリーゴ・ヴェスプッチか他の近代の旅行者の書との連想によるものにちがいない。

ジャン・ド・イブルの蔵書の中には、自ら『サン・ベルタン修道院年代記』 *Chronicon monasterii S. Bertini* で述べているとおり、フランス語マルコ・ポーロの一本があった：「マルクス・パウリは・・・それら地域の多くの驚異を目にし、後にそれについてガリアの俗語で書を編んだのだが、我々はそれの類書をいくつか所有している」。我々がすでに東方研究の分野における功績をたまたま想起したこの仕事熱心なベネディクト会士にとって、かの作品が親しいものであったとしても不思議ではない。事実、1351年にハイトンとオドリーコの手記をアジアものの他の二つの小品とともにラテン語からフランス語に翻訳したのは彼であった。その文選集は、後に様々に増補されてかなりの成功を収めた。この年代記の中で彼がマルコの手記を取り上げたやり方は、テキストを前にすることなく記憶に頼って再現するというものであったことを示しているように思える<sup>19)</sup>。教皇グレゴリウス 10 世となった人物を指すのに用いられている、Teald<テアルド>ではなく Teaboni<テアボーニ>という形（もちろん主格 Teabo から）は、我々が今取り上げているグループに特徴的な形 Ceabo と同一視すべきものである。

### 3. パリの二つの断片

このグループ内部の検討に移る前に、断片 B<sup>6</sup> と B<sup>7</sup> について何らかの説明がさらに必要だと思われる。これらの特別に劣悪な状態からして、読者がそこに戻ってくることはまずありえないだろうからである。

B<sup>7</sup> は、これもひどく痛んでおり解読は容易ではないが、同じ [パ

リ国立] 図書館に所蔵されているテキスト B<sup>4</sup>を前において、必要なところを補ったり最も困難な箇所を参照したりすれば、どんな読者にも近づきうるものとなる。これに対して B<sup>6</sup>は、ポーロのテキストに特に通じていず、生き残っているごく微かな痕跡を直感的に補うことができない者にとっては、その解釈はしばしば絶望的なまでに困難を極めるにちがいないと思われる。したがってここはその転記を掲げておくいい機会であろう。

同断片は、66 から 76 までの番号が振られた 11 片からなる。が、75 と 76 の番号のものは同じ紙の一部としてそれぞれ 73 と 74 のものに加えらるべきであるから、実際は 9 枚である。<sup>4\*</sup>

#### 4. ティボー・ド・セポワのオリジナル

B<sup>3</sup>・B<sup>4</sup>・B<sup>5</sup>に記されている前に引用した声明は、このグループの起源にとって極めて重要である。

どのような根拠があるのか、個人的な記憶から取られたのかそれとも間接的な情報からか、またマルコの何らかの稿本がそこから提供された何かもっと短い覚え書きの文学的な発展なのかどうか、我々には分からない。しかしこれは十分に古いものにちがいない——ジャン・ド・セポワ<sup>20)</sup>をなお生存中として語っている——また筆者はセポワその人かその主君ヴァロワ伯に十分近い人物のようである。これの本質的内容を受け容れてはならない理由はない。すなわち、ティボー・ド・セポワが 1307 年にヴェネツィアでマルコの書のコピーを手に入れたこと、そのコピーのコピーが息子ジャンからシャルル・ド・ヴァロワに進呈されたこと、フランスで知られる同作品の最初の諸稿本がこのようにして誕生したこと、である。

しかしながら、かの声明が含んでいる細部を全て余りにも文字通りに受け取ることは注意しなければならない。

この文章自体が何らかの見直しを必要とする。前掲 3 写本とも、自分の作品のコピーをティボー・ド・セポワから所望されたマルコ

は、bien acoustume en pluseur regions et bien morigine 「<いくつかの地にととても通じ>教養高い」こととて、ごく懇懇にそれに応じたと言う。これは、疑いもなく誤った表現である。<いくつかの地>という句が<とても通じ>と奇妙な風に継ぎ合わされてされている。これはおそらく次の行 *et lui desirans que ce qu'il avoit veu fust sceu par l'univers monde* 「目にしたことが<全世界>に知られるよう強く望み<sup>21)</sup>」を踏まえた訂正であって、この<全世界>が大きさなまでに野心的だと注記者には思えたのであろう。

この改作版が一人の王侯に進呈されたことと、今しがた一瞥したように転記者たちによって勝手に訂正された蓋然性は、この声明がマルコに口にさせている優雅で丁寧な賛辞に重みを与えることができるか、またどの程度か、おぼつかなくさせずにはおかない:「彼は、かくも貴きお方のためにフランスの高貴の地に伝わりもたらされることをとても喜んだ」という。これは、ヴァロワの伯に対するマルコの実際の賛辞を映しているのかもしれないし、自分の主君に対するジャン・ド・セポワの無邪気なお世辞なのかもしれない。

いずれにしても、この「由来証明書」が我々に提供するデータの一つは空想的なものである。すなわち、ティボーはマルコから「それを作成した後その書の最初のコピー」をもらったのだという。したがって、「それは我々が主イエス・クリストの化身の1307年8月に作成された」と言うとき、この言葉からだけでは、それが単に一つのコピーの日付のことかそれとも作品が編まれた日付のことか、我々には決めようがない。一方、ティボーによってフランスに持ち来られたテキストそのものにも、同書は1298年に編まれたとはっきりと書かれている。もちろん、1307年にようやく何か我々には知られぬ理由によってマルコが、ルスティケッロに作らせた版を見直して自分の作品の真正版を作り、それを自分の決定版テキストとして写字生たちに手渡した、と想定することはできる。しかし、ティボーの稿本は——これはその派生本から復元することができるが——そうした假定上の改訂版の最初のコピーでもありえない。余り

にも欠陥が多いことからして、ポーロの直接の監督のもとに行われたのでないことは確信できるからである。したがって、どうしてもかの文章に対する信頼——つまりティボーが直接著者のところに赴き、彼から一本を進呈されたこと——を否定したくなければ、その求めに応じるためにマルコが、書籍商売か誰か個人の好奇心のおかげですでにヴェネツィアに存在していた多くのコピーの一つを手に入れた、と考へなければならぬ。

ティボーが 1307 年に実際ヴェネツィアに滞在していたことは、他の記録から広く証明されている。「ロマーニャ」問題に関わる政治的軍事的な長い滞在で、フィリップ美王の兄弟シャルル・ド・ヴァロワが、妻カトリーヌ・ド・クートニーの夫としてコンスタンティノープルの帝国に所有していると主張していた権利を有効なものとするため、そこに彼を派遣していたのである<sup>22)</sup>。しかしながら、彼のマルコとの直接の関係は、これまたその息子ジャンか、それとも我々が今検討しているかの文章を書いた名の知れぬ筆記者によってつむぎ出された、後の空想かもしれない。おそらく、ティボーが手に入れた稿本に写字生が、慣わしどおり自分の仕事の最後の日付を書き記していたのであろう。そしてその日付が、うっかり写字生ではなく著者のものとされたのであろう。それが、ティボーのオリエントへの出発の時期と一致していたため<sup>5\*</sup>、その結果この武人がまさに最初の稿本を手に入れたと結論されたのである。

逆に、この文章にマルコの署名のようなものを見て取る者もいた。その言葉の一つ一つに絶対的な価値が置かれ、これが載っているテキストに議論の余地なき信憑性と、他の全てのテキストに対するそれに劣らず議論の余地なき優越性が授けられたと信じられた。そして、確実により古いものである F の示す純粹性と直接性という明白な性格については、後に放棄された下書きとしてのジェノヴァ版と考へ、それに対して、フランスのシャルルに贈呈するために用意されたヴェネツィア版が決定稿として対置されたのである。1850 年ポラン・パリスは、不当にもあまりにも無視されてきたこの第 2 のテ

クストの出版を呼びかけた：「最初の編纂の性急さから生じた分かりにくい文章や矛盾は、マルコ・ポーロ自身の最終的決定のもとに置かれた。こうして、今風に言うところと著者によって改訂され、最初の版の誤りがすっかり取り除かれたと言える第2のテキストが確立されたのである。そのテキストがとても明快で平易な文体で書かれており、まだ刊行されたことがなく、大いにそれに値することは少なくとも確かである」<sup>23)</sup>。パリスがほのめかしていたのはもっぱらこの第2版の文体の優越性のことであった。ところが、このより新しいテキストがいくつかの点で内容的にもより優れていると見えたものだから、ポーチェはそれが言葉のもっと広い意味での改訂版をなしていると確信した。すなわち、良好なフランス語での編纂はマルコの考えの最終的で決定的な形であり、由来を明言しているかの声明は、他の全てのものに対する反論の余地なき権威をそれに与えている、と。そこで、マルコの真の言葉を学問に提供でき、5世紀に及ぶ「いわれなき忘却」を埋め合わせることができるかと熱狂的に確信して、パリスのような中世学者——彼への信頼を誇張しているが——によって表明された期待を実現せんとして、自分の刊本の表紙にはっきりと次のように掲げた：「マルク・ポール自身によって校閲され、1307年彼からティボー・ド・セポワに進呈された書の最初の編纂物を提供する」。ポーチェを導いていたこの確信はその注釈の中に露呈しており、Fとの異なりをことごとく適切な訂正として説明しようとする。しかしそれはとりわけ、彼の版の理論的拠り所が論議の対象となるやたちまち、彼がそれでもって批判に反応した悲嘆にくれた論争に現れた。澄明な良識でもってG.ビアンコーニは、ポーチェのテキストを地理学協会によって刊行されたテキストと対校するだけで、この新しいテキストの、ただ単により古いテキストの誤解として説明でき、したがって著者にその責を帰し得ないいくつかの個所を浮き彫りにした。彼は、ティボー・ド・セポワに仕えていた誰か書記が、主人からフランク・イタリア語テキストにちょっとした言語の衣装をほどこす仕事を任されたのだが、無知か軽率から自

分の仕事の限界を踏み越え、遺憾な改竄の責を負ってしまった、と推測した<sup>24</sup>。これに対する回答の中でポーチェは——P.パリスの権威とかティボーのテキストのより優れた言語的美しさといった、いくつかの奇妙に些細な理由はさておき<sup>25)</sup>——かのいわゆる「由来証明書」と、彼の言うヴェネツィア版には F と比較してより優れた、つまりマルコの考えにきつとより叶った個所が現に存在するという以外、自分の選択の正当化を持ち合わせていない。

この最後の理由は実際に重みをもつ唯一のものであり、それを知らなかったというのはビアンコーニの側の手落ちであった。F と対校すると、確かにティボーのテキストは時によいヴァリエーション、より好ましい読みを提供することがある。

しかし、ポーチェの仕事を単なる不幸な試みとし、ポーチェ・ビアンコーニ論争を実りなき争いにしてしまったのは、まさしく F と FG という二つのタイプの対照に限ったことである。Fr.1116 をさらに正確に解釈し、マルコがティボーに与えたであろう稿本をその派生本<全て>に基づいて復元することによって、これら二つのタイプをその純粋な形において対照すべきであったということはさておこう。しかし、これら二つのタイプ以外に、ポーロの作品の広範な写本の伝統は、他にも無視し得ないものを提供するし、F がジェノヴァの獄で編まれたオリジナルであると直ちに同定することはもちろんできないことはすでに述べた。可能ならば FG と対照させることが必要な基本的モデルは、F も対照されるべきものと同一なのである。

事実の厳格な基盤に立って作業を進め、先に挙げた校本が由来する今は失われた原本を正しく復元しようとする者は、ティボーがヴェネツィアで手に入れたコピーに直接たどり着くわけではなく、その改作版に至るのである。すなわち、モデルとして F に似たテキストを想定する版にたどり着くのである。ヴェネツィアの稿本を F<sup>1</sup>、今検討しているグループの祖本を FG とすると、FG と F<sup>1</sup> との関係にとって一般に、ビアンコーニによってポーチェのテキストと

ルーのテキスト[F]との間に認められた関係が有効である。言葉はより適切でより純粋であり、作品はある点でより秩序だった様相を呈しているが、余りにも恣意的な手直しが多いことを咎めるべきであり、改作者は自分が理解できないところを省略したり変えたりする権利を余りにも行使し過ぎている。F<sup>1</sup>はしかし——FG を通じても見られるごとく——F の一兄弟である。一つの同じテキストのけっこう近い二つのコピーである。いくつかの点で一方のほうが良く、他のいくつかでもう一方のほうが良い。当然ながら、これらが由来する元のオリジナルに対して、幸いなことに同じ誤りと同じ欠落を持たない。互いに補い合い、訂正し合う。

B<sup>3</sup>・B<sup>4</sup>・B<sup>5</sup>の声明はしかしながらすでに、少し注意深い読者なら、正しい道に導くはずのものであった。ラングロワは、彼が B 版と呼ぶこれの十分な言語的正しさを認めた後、慎重に付け加える：「マルコからティボー・ド・セポワに贈られた稿本は、そこではフランス語でなかったことは十分に確実である。ティボーは、現地ヴェネツィアでかおそらく帰国後フランスで、誰かにそれをく自分に合うように>させたのであろう。<ティボーが自ら持ち帰った写本をすぐにシャルル・ド・ヴァロワのもとに届けることをしなかったのは、まさに時間を要するこの手直しの必要のためであったことは疑いない>。その写本は彼自身が最後まで手元に置いていた。その息子ジャンは、フランス宮廷のセポワの師やパトロンには、彼らのためにより好ましく分かりやすいフランス語に着せ替えられたいくつかのコピーしか配らなかった」。26)

われわれの写本の一つ A<sup>1</sup>のタイトルは、今まで注意されてこなかったが、この問題に関して無意味でない要素をはらんでいるように私には思える：「ここに本書の見出し始まる・・本書はクリストを信仰する最良のヴェニス市民マルク・ポル殿の書を私グレゴワールが *contrefais*<作り直した>ものである」。このタイトルは、D のオリジナルモデルにもあった。この場合は見知らぬグレゴワールの名は削られているが、文はほとんど手つかずである：「ここに、イエ

スクリストを信仰するヴェネツィア市民マルコ・ポーロ殿の書という本書の全ての見出しの一覧が始まる」。A<sup>3</sup>はA<sup>1</sup>から独立しており、その個所を残しているものの、恣意的に改められている：「ここに世界の記と呼ばれる本書の一覧が始まる、本書は良き市民でありいと良きクリスト者であるマルク・ポール殿の書を私グレゴワールが *contrescrit* <書き直した>ものである」。<作り直す>に対して後のA<sup>3</sup>の写字生が下している解釈は、私には全体的に的を射ているとは思えない。この言葉でもってグレゴワールが、単なるコピーの仕事ではなく自由な模造を示したことは大いにありえる。最初の自由な改作を認めることへは、グループ全体を検討することによって導かれる。当然ながらグレゴワールの中に最初の簡潔なフランス語コピー、すなわちジャン・ド・セポワからフランス王シャルルに贈られたコピーの著者を見ることが可能である。

その彼については何も発見できなかった。その仕事は多分 1308 年に果たしたのであろう。あるいは少なくとも、マルコがすでにプロローグで明らかにしていた著述の日付けを繰り返し、グラン・カアンについて述べている個所での D のヴァリエーションは、そうした意味で年次を示唆していると考えられるのではないかと思われる。すなわち、「彼は統治し始めて現 1298 年までに 42 年になる」<sup>6\*</sup>に対して D は、「現今のクリストの 1300 と 8 年までに」とある。機械的な日付、単なるうっかりミス、これについては他の写字生は皆簡単に気がついたに違いない（なぜなら、もちろんより後世のものである D の非意志的な日付ではありえないから）。これをそのまま残している D の写字生は、事実その仕事の残りにおいてもかなり鈍感であったことを暴露している。

1308 年にはティボーはまだフランスに戻っていないが、マルコのコピーはすでにそこにあったかもしれない。グレゴワールはこの武人にずっと付き従っていたのかもしれない。

## 5. 様々な下位グループの特性

前に挙げた 15 の写本が F の一兄弟の改作版から派生したただ一つの家族を構成することは、それら同士と今に残っているフランク・イタリア語テキストと対照すると明らかとなることである。その例として、全ての中で最も簡潔な版である C<sup>1</sup>のどれでもいいから 1 章を転記し、F のテキストが改作されている個所をイタリック体[<>内]で示そう。ここでは我々のテキストの第 III 章に当たる個所を取り上げる<sup>7\*</sup>：

「そしてソルダイエに<やってくる>、<彼らはかく考え>さらに前進するするのが<いいように思えた>。で、ソルダイエを發って旅に出、馬を駆ってバルカ・カアンという名の<タルタル人>君主のところにやってきた。この君主は彼らを一歓迎し、その到来を喜び、彼らは持ち来たった宝石を全て彼に贈った。君主はそれを喜んで受け取り、とても大切にした。そして、2 倍の価値のある宝石を賜った。彼らがこの君主のもとで 1 年もあったとき、バルカ[ベルケ]と東タルタル人の君主アラン[フラグ]との間に戦争が起こった。<彼らは双方とも大軍を作った。が最後に、西タルタル人の君主バルカが敗北した。>そして双方とも、<多くの者が死んだ>。<かくて><この戦争の>ため、捕まらずしては誰も道を進むことはできなかった。彼らがやってきた道には<そのような危険があった>。<で、前へは誰でも安全に進むことができたが、後ろに戻ることはできなかった。>そのため、<これら 2 兄弟には、後戻りできないからさらに前進するほうがいいように思えた>。こうしてバルカのもとを發ち、西の君主の国の果てにあるオウカカという名の町に来た。そしてオウカカを發って、ティグリの<大>河を渡り、16 日行程の長さの砂漠を進んだ。<野に草をはむ>家畜で暮らすテントの中のタルタル人以外には、町も城塞も見えなかった」

書き手の違いによる避け難い異なりは別として、この文章は、この章を有する 12 の写本において<全て>本質的に同じ形で現れる

(B<sup>6</sup>・B<sup>7</sup>・C<sup>4</sup>は、このグループに属することは疑いないが、この個所をもっていない)。F に対する異なりはすべてに共通する。F と較べて同じ削除 (F: *iront encore plus avant*「<さらに>前進する」、*et que vos en diroie*「で、これについて皆さんに何をお話しましょうか」、*qu'il ne trevent aventure que a mentovoir face*「特に述べるべき出来事に出会うことなく」、*il les envoia a parer en plosor partie e furent mout bien pares*「彼らはそれをいくつかの地に送って売ったが、とてもよく売れた」、*il se combatirent ensenle*「彼らは激しく戦った」、*il i s'aparoillent*「彼らは支度を整えた」)、節の同じ移動 (*et hi ot grant maus*「大きな被害を被った」)、16-18 行の同じ大幅な短縮、同じ追加 (ティグリの *grant* <大>河、*qui pessoient es chans* <野に草をはむ>) がある。

この章から得られる観察は、グレゴワールの作品全体に適用できる。オリジナルテキストの大部分は、何らかわずかな言語的手直しは伴うがけっこう忠実に再生されている。しかし、重苦しい場面転換の語句は好んで犠牲にされ、余りにも込み入っていたり古めかしい構文は慣用句やより身軽な文章で置き換えられ、意味のいささかはっきりしない個所は大きく短縮されるかまさに切り捨てられている (改作者は第 9 行の *parer* <売る>も 18 行の *traesse* <回り道して>も理解できなかつたのだと思う)。書き直しは大雑把な近似化に甘んじることになり、それは時として、マルコの真の考えを偽って伝える。原文 *demoirer auques* <しばらく滞在する>が *venir* <来る>に、*en la tere de Barca* <バルカの地に>が *avec ce seignor* <その君主とともに>となっているのがそれである。

このグループのどの写本も完本ではない。A<sup>1</sup>・A<sup>2</sup>・A<sup>3</sup>・D は我々のテキストの第 CCVI 章の最初の数行の後で中断している。A<sup>3</sup>と D は、それぞれの写字生によって自らの捏造になる結びでもって完結されているが、誰の目も誤魔化せない。C<sup>1</sup>・C<sup>2</sup>・C<sup>3</sup>は我々の第 CCV 章のほぼ真ん中で留まっている。B<sup>1</sup>・B<sup>2</sup>・B<sup>3</sup>・B<sup>4</sup>は、我々の第 CCII 章で閉じている (B<sup>5</sup>は 1 枚欠落があるに違いなく、ほぼ確実

に同じ閉じ方をしていた)。ティボーが持っていた稿本が最後に欠落していたのか、それともグレゴワールの改作が未完に終わったのか。そのどちらの場合も退けられないが、大いにありえるとも考えることもできない。A・D・C、すなわち欠落がより少ないグループでの物語の断ち切れ方は、最後の数葉が偶然になくなったことを考えさす。グループ B はカイドウの娘の章で終わっているが、それが偶然ではなく、最後の重い数章を意図的に切り捨てたのだとしても、その歴然とした欠落が A・D・C と共通していることは、いずれにしてもこの欠損が極めて早い段階で生じたことを証明するに充分である。

失われた中間写本の数がいくつであれ、今に残っている写本は、すでに述べたごとく四つの異なるグループに分かれる。これら異なるグループ間にどのような親戚関係があるのか、失われたオリジナルの復元のためにそれぞれどのような重要性をもつのか、各グループの祖本に対してそれを構成する個々の写本はどのような価値を有しているのか、これらは今まで批評家たちによって明確にされたことはなかった。

ポーチェが知っていたのは三つの写本、すなわち我々の A<sup>1</sup>・A<sup>2</sup>・B<sup>4</sup> だけであり、それを自分の版に用いた。最初彼は自分のテキストの底本として B<sup>4</sup> を採用したが、転記が終わってみると、A<sup>1</sup> と A<sup>2</sup> の方が「より古く、文体もより古めかしく見えるくけれども」(p.XCIII)、それよりはるかに優れていると思えた。それで A<sup>1</sup> に決め、それが f.59 b に呈している大きな欠落を埋めるためと、自分のテキストに研究資料の体裁を施すために、A<sup>2</sup> を用いた。B<sup>4</sup> も同じ目的に役立てられた。彼の版は——もっと一貫した正確なやり方で進められていれば<sup>28)</sup>——A<sup>1</sup> のとても有益な出版となっていたことであろう。B<sup>4</sup> の価値および A<sup>1</sup>・A<sup>2</sup> との関係については、彼はほんの漠然とした直感すら持ち合わせなかった。

1882 年にドリズルは<sup>29)</sup>、C<sup>1</sup> のコロタイプ版を複製した折、自分の知っていた六つの写本の「仮」分類でもって、ポーチェの犯した

誤りを証明しようとした。彼はそれを次の三つのグループに分けた：1)  $A^1$  と  $A^2$ 、同一の写本に由来する 2)  $F$  と  $B^4$ 、互いに独立しているが原初の形に極めて近い 3)  $C^1$  と  $C^2$ 、第2グループに劣るが第1グループに優る。

G.レノーは<sup>30)</sup>、十の写本の分類の試みを行ない、まず  $a$  と  $b$  の2グループに分け、それをさらに二つに分け ( $a$  は  $B^1 \cdot B^2$  と  $B^4 \cdot B^3$ 、 $b$  は  $A^1 \cdot A^2$  と  $C^1 \cdot C^2 \cdot C^3$ )、稿本  $D$  は  $b$  に入れ、同グループの二つの部門のどちらからもそのテキストを得ているとした。『ラテンオリエント協会出版』の中で彼自身がポーロの数章について編纂した批判版の論文に、自分の考えをさらにはっきりと余すところなく発表し、 $B^1$  と  $B^2$  に他の写本に対する絶対的な優越を事実でもって認めた。

以上のような様々な試みを不毛のものとした誤りは、今は失われた  $FG$  が基づいた原本であるやはり失われた  $F^1$  が  $F$  の兄弟であったにちがいないことと、様々なグループの間をぬってこの家族の祖本に遡るためには  $F$  との対校が唯一の客観的な基準である、ということを理解しなかったことにある。<sup>31)</sup>

この必須の前提——この家族が  $F$  に極めて近い一稿本に由来すること——を認めれば、つまり一貫した対照の相手として  $F$  を採用すれば、この家族自身が惹起する様々な批評上の問題は、その解決が十分に容易なものとなる。個々のグループの同一の特性は、それにはこの家族の様々な構成員内部の対照を確立すれば十分であるが、上に立てたやり方でもってすれば、さらにくっきりしたものとなってくる。しかし、この4グループのどれも単独では  $FG$  はもちろん  $B$  すらも復元するに十分でない。 $B$  は、その構成員の数の点でも、それらのいくつかのモノとしての古さの点でも時に  $F$  と一致する忠実さの点でも、全部の中でおそらく最も重要であろう。

$B$  と残りの家族とのはっきりとした対立と、他のグループとの共通の起源は、私には確実なことに思える。純粹な読みが  $B$  だけに残っている場合が頻繁であるのに対して、残りの稿本では一様に変形

して現れる。以下いずれも F と一致している例であるが、例えば B 「赤い真珠がある」に対して、他の写本では「食べるととても美味しい赤い鶏がいる」(Pauthier p.539)。B 「オセアヌ海」に対して、他の写本「西の大海」(p.551)。B 「その6日の3日行程で」に対して、他の写本「その3日の後6日行程」(p.523)。B 「黒い角」、他の「白い角」(p.570)。B 「湾全体に」、他「湾の周囲に」(p.604)。B 「すっかり地に」、他「ぐるりに」(p.546)。B 「80リーヴル」、他「4リーヴル」(p.522)。B 「象ほどの大きさはまずない沢山の一角獣」、他「象ほどの大きさでない一角獣も」(p.570)。B 「クリストの1285年」、他「クリストの1295年」(p.550)。B 「真珠や宝石といった商品」、他「豌豆や宝石といった商品」(p.527)。B 「ラクダと馬や男女の奴隷」、他「馬、鞍、武具」(p.503)。B 「猫のような毛をした」、他は単に「毛がある」(p.524)。B 「空気は夏にはとても腐敗している」、他は単に「空気は腐敗している」(p.401)。F と一致しない場合でも、B が我々に提供するヴァリエーションはしばしば他のすべての稿本と異なっている。例えば、F 「9歩」、B 「8歩」、他「20歩」(p.523)。F 「1269年」、B 「1279年」、他「1268年」(p.547)。またこのグループの文体的特徴は、他と比べて十分に個性的であり、私の知る七つの写本のそれぞれにおいて簡単に識別できる。それがどのようなものか理解するには、少し前に掲載した B<sup>6</sup> の未刊のページを、ほぼ全面的に A から採られたポーチェのテキストと対照されたい。その構成員すべてに共通する典型的な誤りのうちのいくつかのリストは、そうした対照を補い、B の統一性を決定的に確認するのに役立つだろう(注の代わりに対応する F の個所を参照されたい<sup>8\*</sup>)。

XII 1 「2人の兄弟と他の多くの者たちはいかに彼らとともにアークルを發ったか」(F: 「二人の兄弟とマルコはいかにアークルを發ったか」) XXIII 3-4 「昔は全ての王とともにある印をもって(B1・B2 aves)生まれた」(F: 「昔この地方の王は皆肩にワシの印を帯びて生まれて来た」) XXXIII 13 「キシとアルクモサまで」(F: 「キシとクルモサ [ホルムズ] まで」) LXII 17-9 「彼らはその資力に応じ

て妻を 30 人かそれくらい娶り、その夫は代わりに自分の妻を与える」(F:「彼らは妻を 30 人までか、金があるか養えるかに応じてそれくらい娶る。また夫は婚資として資力に応じて妻に家畜・奴僕・金銭を与える」) [以下略]

他にも、このグループが一様に、F ではなく確実に FG に帰しえる読みをさらに崩れた形にしている特徴的な箇所を沢山引くことができるだろう。またそこでは、その最初の写字生の文学的素養のなさや職業上の無能さが、馬鹿げた書き換えの例から確認できる。ポーチェが何故、何よりも自分のテキストの読みやすさを心配して、このグループで唯一知っていた稿本である B<sup>4</sup>を出版することを止めたかがとてもよく理解される。

B はさらに小グループに分けられる。

B<sup>1</sup>と B<sup>2</sup>は一对をなす。同一写本の空間的にも時間的にも極めて近いコピーである。その同一性は、もしこれら二つが同一の手になるものであったなら——私にはそうではないと見えるが——さらに大きかったであろう。それは綴りの特長にまで及んでいるし (assez <とても>を ces, de l'an<年の>を au chief de la, astrologues<星占い師>を estreloges, religion<宗教>を celegion, seloc<によって>を selec, garces<娘>を graces 等)、挿絵の似かよひもそれをさらに目にも明らかなものとしている。例えば、両写本の第 124 章共通の見出しに、「一つは金もう一つは銀」の二つの塔が「絵に」見られと記されているが、実際にそれが描かれている。もっとも、細密画は B<sup>2</sup>の方が B<sup>1</sup>のよりはるかに優れているが、テキストについては同じことは言えない。こうした一致を壊すいくつかのさして重大でない異なりは、B<sup>2</sup>の有利には働かず、むしろ最初は B<sup>2</sup>が B<sup>1</sup>の単なるコピーであるかのごとき印象を与える。B<sup>1</sup>は例えば touz les tartars du quant il le sorent<・・・の全タルタル人・・・であった時>と、du の後の monde<世界>を飛ばしている。B<sup>2</sup>はこれをさらに悪化させ、touz les tartars du grand il le sorent<大 [汗]の全タルタル人は・・・であった>とある。第 111 章 (B の番号によ

る)の見出しは両写本とも「グエンジャンフの町について、王国がある。グラン・カンがいかにかに息子マンガレイを戴冠したか見られる」。ところが、戴冠式を描く細密画は B<sup>1</sup>にしかない。それでも、一つの共通の原典からであることを証明する要素は、確信していいものように思える。B<sup>1</sup>では第 165 章の最初の語句は何らか移動されたことを示しているのに対して、B<sup>2</sup>では同グループの他の写本と同じ語順になっている。さらに 2 度 B<sup>2</sup>はこのグループの読みを残している。すなわち第 4 章、B<sup>1</sup>:le vous contera<彼が皆さんにお話するだろう>に対して B<sup>2</sup>:le vous conterai<私が皆さんにお話しよう>, 第 161 章、B<sup>1</sup>:en celle nasule que de II vens に対して B<sup>2</sup>:en celle ne s'use que de II vens<その中では 40 しか使わない>。第 122 章では B<sup>2</sup>は B<sup>1</sup>より完全である:car presque toit la gent du roy y furent occis et le remanant tout desconfis<すなわち王の兵はほとんど全員殺され、残りは皆降伏した>。B<sup>2</sup>には occis<殺され>が欠けている。第 69 章では B<sup>2</sup>:leur esture sont de touz le plus dras<彼らの衣装は全て最・錦である>とあり、plus と dras の間に空白がある。この欠落は B<sup>2</sup>とは異なるモデルを考えさす。何故なら、B<sup>1</sup>にははっきりと le plus de dras<最上の錦>と読めるからである。正しい読みが haras<種馬>である個所では、B<sup>1</sup>は bains<浴場>, B<sup>2</sup>は hains<憎悪>となっている。B<sup>1</sup>:demoura en son appareil<支度において遅い>, B<sup>2</sup>:demoura est son appareil<支度が遅い>となっているのは、2 人の写字生が上に省略記号のついた同じ e を違ったふうに解釈した証拠である。両テキスト間の他のいくつかの隔たりは、B<sup>2</sup>の不注意として十分に説明することができる。それらにおいて B<sup>2</sup>は B<sup>1</sup>からもグループの残りからも離れているからである:Bogata<ボガタ>を Flogata<フロガタ>, l'epsodie<飾り>を le yodie<宝石>, Suficar<スフィカル>[肅州]を Susicar<スシカル>, MCCLXII<1262 年>を MCCLXXII<1272 年>(山の老人に対する遠征の日付)等。

B<sup>3</sup>・B<sup>4</sup>・B<sup>5</sup>は、B<sup>1</sup>・B<sup>2</sup>に対してはっきりと異なるもう一つの

下位グループをなす。B<sup>3</sup>が他の二つよりかなり古く<sup>32)</sup>、B<sup>5</sup>がB<sup>4</sup>よりはっきりと新しいとしても、共通の祖本の特徴的な個所を再生している一致は、ある意味でこれらを同世代のものとしている。これらが派生している元の写本は、B<sup>3</sup>にとってはほぼ間違いなく直接のモデルであろうが、B<sup>4</sup>とB<sup>5</sup>は中間写本、それもおそらく同一の、を通じてそれに遡るにちがいない。すなわちB<sup>3</sup>にはない誤りを共有しているし（両者とも例えば、コカチン姫を17ではなく15歳とする）、B<sup>3</sup>ではもっと短い形になっている箇所を同じように引き伸ばしている（例えば前掲引用個所参照）。時代的により後のB<sup>5</sup>は、数多い誤り、頻繁な勝手な追加、曖昧な個所や語彙の絶えざる言い換え、言葉と文体を一貫して新しいものに変えること、こうしたことのため興味に乏しく実際上の有益さは何もない。FGに対してB<sup>4</sup>よりも保守的な形が残っている個所は、それから派生したのではないことの証明としてのみ興味を引く。例えば、ポーロ2兄弟のアークレ到着を1260年ではなく1460年に置く。マルコが自分の滞在した町について述べていることをグラン・カアンのことにする：「彼らは、グラン・カアンのいるクレメンフの町に着いた。彼はとても豪華に身を飾っていた」。archerie<弓手>をfacon<習慣>と訳したり、古いo<と>をou<あるいは>と混同したりする。以上はもちろんほんのごく一部でしかない。B<sup>4</sup>は、これも言語的には少し新しいものに変えられてはいるが、内容をずっとよく尊重しており、B<sup>3</sup>の確認、時にはその完成や訂正の役に立つことがある。以上からして、この第2グループの現実とその特徴的な性格について何らの疑いも残らない。それぞれの写字生の避け難い欠点もこのコピーの価値を損なわない。しかしポーチェは、その断続的でしばしば不忠実な注記でもって、その真の性格を我々に示すことに成功していない。不注意や誤解も欠けていない（「多くの部分に」が「全ての部分に」、 「7ヶ月」が「1ヶ月」、 「百の腕」が「百のズボン」等）；いくつかの新たな欠落の責も負わねばならない（CLIII 64以下、car sachiez <つまりご存じありたい>で始まる二つの文の最初の方が飛ばされ

ている：「つまり、彼らはとても清潔に暮らし、世界で最美・最良・最大の風呂を持っていることをご存じありたい」）；その規模と数は大したことはないが、恣意的であることには変わらない加筆を犯している；自分が転記しているテキストの意味をしばしば見抜いていない（例えば CXXXV 15: *et sachiez que* <またご存じありたい>ではなく、意味の通らない *et sa que* <また知っている>が残されている）；しかし、時には筋の通った訂正を施すこともある（XXVI 12-3: 「この地のキリスト教徒をサラセンに改宗させるか、そうしなければ殺す」。この個所は他の写本では *sarrazins* <サラセン人>の後に不可解な *contre* <に対して>があるが、これはおそらくその前の *touz* <皆>の影響であろう。LVIII 49: 「この地域の *ceux* <者たち>もそうする」の *ceux* は B<sup>4</sup>の追加。LXXII 14: 「個人所有の飼牛がいる」に対して、この下位グループでは：「彼らが捕まえた・・がいっぱいいる」。LXXV 73: <香の>ではなく <オンスの>。LXXXIV: <落葉した>ではなく <垂れ下がった>等)。同じことが B<sup>3</sup>にも言える。コピーとしてこれまた、頻繁な不注意が見受けられる (*dates* <日付>を *tades*、*aourours* <夜明け>を *aouras*、*font* <する>を *front* <前部>、*trois pas* <3歩>を *quatre pas* <4歩>、*sage homme* <賢者>を *sa homme* <その人>等)；これも、自分の典拠の欠落に新たな小さな欠落を加える (CXLVIII 2: 「*l'en* <人は>そこを発って」；CLVIII 9: 「また港が *c'est* <ある>」；CLX 17-8: 「またものすごく大量に *ont* <ある>」等)；たいていは無視しえるものだが、その改新の中にはいくつかが好ましい手直しもある (CXCI 29: *dacles* を *dades* (F: *datal* <ダッテリ>；CXXXI 36: B<sup>1</sup>・B<sup>2</sup>・B<sup>4</sup>の *la de Sindinfu* を *la province de Sindinfu* <シンディンフ地方> (F: [*se treuve*] *l'en a Sindinfu* <シンディンフに至る>))。しかしこれら二つの写本に対する我々の興味は、その個々の特性のためよりは、それら同士および同グループの他の写本との関係、すなわちポーロのテキストの変遷の歴史的意味のためである。これらが同一のコピーに由来することはすでに述べた。<足と嘴は

赤い>(XXXVI 11)が、B<sup>3</sup>では<足とそれは赤い>、B<sup>4</sup>では<足は赤い>とあることから、共通の底本として崩れたテキストがあり、それが B<sup>3</sup>ではそのままになり、B<sup>4</sup>では改善されたと推定することが許される。<彼らの父はまだ生きている>(CLXXX 16)が、B<sup>3</sup>では<彼らはまだ生きている>、B<sup>4</sup>では<彼らの王はまだ生きている>となっているが、ここでも我々は欠落のある同一のモデルに遡ることができ、B<sup>3</sup>はそれをそのまま再生し、B<sup>4</sup>はそれに気づいて訂正したのである。逆の場合、つまり B<sup>4</sup>に欠落しており、B<sup>3</sup>ではそれが誤った読みになっている場合もある(CXXI 2 : B<sup>3</sup> <60>に対して、B<sup>1</sup>・B<sup>2</sup> <20>)。これは、共通の原典に何らかのインクの染みがあったからにちがいない。二つの筆跡の緊密な似かよいは、おそらく部分的にもせよ同じ由来と共通の典拠の近さでもって説明されるであろう。各章の大文字で書かれた冒頭文字の数まで同じである。

下位グループ B<sup>3</sup>・B<sup>4</sup>・B<sup>5</sup>の緊密な一致は、何よりもまた余すところなく、下位グループ B<sup>1</sup>・B<sup>2</sup>とは異なる書き込みを共有していることに表われている。

これら二つの下位グループの原本がすでに互いにはっきりと異なっていたことは、2番目のグループに見られぬいくつかの欠落が最初のグループにはあったり、その逆の場合からだけでも明らかとなる。例をいくつか引こう(イタリック体[< >内]は写字生が飛ばしている部分)。

I. — XLVI 17-8:「この町を一つの川が *queurt*<流れている>」  
LXIX 44:「これは他の者に対して長男がするが、*autres*<他の>者はしない」  
LXXII 40:「その両親に自分の *biens*<財産を>たっぷりと与える」  
LXXIV 33-4:「そこは *Soifa*<スワファ>と呼ばれる。狩猟が *Il ont*<できる>」  
XCIII 7:「これら1万のうち1頭の大きなマスティフ犬を *IIM<sup>M</sup> que chascun a*<それぞれ持っているものは2千人>である」  
CLXXIX 17-8:「彼は王になりたくなかった。  
*Et quant son per vit son filz ne vouloit estre roy*<父は息子が王に

なりたがらないのを見て>」

II. — XIX 20:「しかとご存じありたいが、彼らは海に乗り出す quant<と>」 XCVIII 12-3:「良かれと思えるよう esleu tel<に選ぶ>と」 CXVIII 7:「laurier<月桂樹>のような葉をした小さな木」 CXLVIII 13:「マルコ殿はそこに一度に plus de X<sup>M</sup> nef<1 万以上の船が>集っているのを目にした」 ibid. 25:「皆さんに di<言う>がその索は」 CLVI 12:「彼は de sa droite mort<自らの正しい死に方を>したのでないから」

第1グループに固有の異読はたいていの場合元のテキストの崩れを表しており、第2グループではそれを免れている（以下わずかな例であるが、先に誤った読みを、次に第2グループの正しい読みを挙げる）。

IV 3:La province a aussi a nom Barac<その地方はやはりバラクという名である> — La province a aussi a nom Bocara<その地方はやはりボカーラという名である> VIII 20:que il lui demandassent a porter<彼に持ってくるよう頼むように> — que il lui deussent aporter<彼に持ってくるように> XIX 30 estoire<物語> — escoste<護衛> XXIII 18 viennent<来る> — vivent<暮らす> ibid. 29:entre II cestes mer<これら二つの海の間> — entre dedens ceste mer<この海に注ぐ> XXXI 4 Sarra<サラ [イ]> — Saba<サバ> XXXII 22: Alla<アラ> — Ava<アヴァ> [以下略]

正しい読みが B<sup>1</sup>・B<sup>2</sup>のほうである場合も、それよりは少ないがけっこう数多い（第2グループの誤った異読を先に挙げる）。

III 11-12:il furent grant ost<大軍だった> — il firent grant ost<大軍を作った> XVIII 11 Cora<コーラ> — Coia<コィア> [ホージャ] L 29:mauvaise gent du remanant<残りの悪い連中> — mauvaise gent durement<酷く悪い連中> LXIX 34 lart<脂肉> — lait<乳> LXX 41:d'un destriers<軍馬の> — du derriers<後ろの> LXXVIII 12:favourables<有利な> —

fauconners<鷹匠> LXXXII 11:mille<千> – dix mille<1万>  
 XCV 15:chantant<歌いながら> – chacant<狩をしながら>  
 XCIX 57:a un seigneur<一人の君主に> – au seigneur<その君主に>  
 CXXI 68:que tout ce qu’il aura a l’esperit commande<靈魂に命じる全ての事> – que tout ce que l’esperit aura commande il sera fait<靈魂が命じる全ての事がなされるよう> CXLI 6-7:clef du royaume<王国の鍵> – chief du royaume<王国の主>、等。

両グループの読みが互いに異なり、どちらも間違っているという場合ももちろんある (B1、B3 の順)。

XXXV 8:ars e tartars<弓とタルタル人> – ars torquois<トルコ人の弓> (F:arc et carcas<弓と箠>) XXXVI 20:tartars<タルタル人> – carans (F:carauanas<カラウナス>) XL 5:qu’il ne puent autre avoire pour le soif<喉の渇きのために他に何も持てない> – qu’il ne puent autrement faire pour le faire<それをするために他に何もできない> (F:<荷獣が大いに難儀して飲む [水] 以外>) XLI 19:hacasis<アカシア?> – harcassiz (F:asisin<アッサシン [暗殺者]>) ibid.10:et haut ainssi comme chastains<栗のように高い> – et est fait aussi comme le chastains<栗のようになっている> (F:<栗のイガに似たイガをつける> LXXIV 15:sasmuel – sasmul (F:guasmul<混血児>) CXXI 11:recoivent l’enfant<子供を受け取る> – lievent l’enfant<子供を起こす> (F:<子供を産む>) CLXIX 20:se il perissoit<亡くなると> – se il y passoit<そこを通ると> (F:< [人を] 捕まえると>) [以下略]

B<sup>6</sup>とB<sup>7</sup>は、それを構成するわずかな断片から判断できる限り、上に述べた五つの写本から独立しており、上述2グループのどちらにも含まれない。またそれらが由来する二つの祖本のどちらも、そのどれにも認めることはできない。それら祖本、特にB<sup>3</sup>・B<sup>4</sup>・B<sup>5</sup>が由来するものに、とても近いコピーのように思える。

B<sup>7</sup>には、Bの番号での61章の最後、66章(間違って56と書か

れている)と 67 章、68 章の最初、69 章の最後と 70 章の最初が含まれている。制作は、テキストの観点からはかなりお粗末である。

グループ C によって今に伝えられている版は、B については可能であったごとき正確さと完全さをもって元の形を復元することはできない。このグループは実質的には C<sup>1</sup>に尽きる。

C<sup>4</sup>は、すでに述べたごとく 2 葉だけからなり、それには第 121 章の最後と 122 章の大部分、134 章の最後、135, 136, 137 章と 138 章の最初の数行が含まれている。この番号は FG に典型的なもので、この断片でも用いられている(何故 CXXII ではなく CXXIII と記されているのか私には説明がつかない。多分写字生の誤りであろう)。残っているこれらわずかな行は、きっと C<sup>1</sup>より古く多分もっと揃っていたテキストに基づいて作られたものであることを示唆する。C<sup>4</sup>には「財と人においてとても強大な王だったファクフル」とあり、これは F と一致する。一方 C<sup>1</sup>は「莫大な財で *de grant tresor* とても強大な王だったファクフル」となっており、同じ語句「人と財で *de gent e de tresor*」を語順を入れ替えた形に誤って読んだと疑ってしかるべきである。この断片の第 135, 136, 137, 138 章が他のグループの稿本においてと同じ番号になっていることも注目値する。C<sup>1</sup>では、アムとトロマンの章は飛ばされており、その所から番号は通常のものに較べて二つ少なくなっている。C<sup>4</sup>の番号は、これらの章がグループの祖本には欠けていなかったことの疑いない証拠である。もっとも、C<sup>4</sup>あるいはその直接のモデルにおいてそうだったと敢えて言うつもりはない。C<sup>4</sup>と C<sup>1</sup>の対応は次のようなものだからである。すなわち、残った 2 葉に含まれる部分における C<sup>1</sup>の行数と C<sup>4</sup>の 1 面に含まれている C<sup>1</sup>の行数の間の関係は八つの面に正確に対応している。

C<sup>2</sup>は、ドリズルによって C<sup>4</sup>の全くの単なるコピーと断定された。そのことは、C<sup>4</sup>がルイ 12 世の時代に実際にオンフルール、すなわち C<sup>2</sup>が属していたグラヴィユの提督の下にあったという事実によって肯定されるかもしれない。しかし、実際直接の関係があったか

どうかについてはいささか疑問が残る。C<sup>4</sup>では、カイドゥ王の戦いの章は大きな欠落によって中断されている：car il savoit que a caracoron es pour retourner en lour contree<つまりカラコロンに・自分たちの地に帰るために・知った>。ここの es でページが終わっており、es と pour retourner の間に欠けている部分はちょうど紙 1 枚分に相当する。この欠落はまさしく C<sup>4</sup>の 1 葉の紛失によって生じたのではないかと疑ってしかるべきである。ところが、C<sup>2</sup>は（C<sup>3</sup>と同じく）この点で次のようにある：car il savoit que a Caracoron estoit Nomagon<カラコロンにノマゴン[ノムガン]がいることを知ったから>。この加筆は、文脈からは暗示されえないし、少なくともファクシミリから結果するかぎり、C<sup>1</sup>のいかなるページ送りによっても正当化されえないものである。C<sup>2</sup>は pour ce que nos veismes tous nudz en ce monde であるが、C<sup>1</sup>は文字を省かずに pour ce que nos venimes tout nu en ce monde<我々は皆この世に裸で生まれて来たのだから>とあり、これは C<sup>2</sup>のモデルで言葉が短縮されていた証拠である。同じことが、C<sup>2</sup>の leur langage leur lart et leur escripture に対する C<sup>1</sup>の leur langaige et leur latres et lor archaier<彼らの言葉と文字と書き方>、C<sup>2</sup>の qui vous verra に対する C<sup>1</sup>の que il vos verrai<私は皆さんに望みたい>についても言え、文字を略していない。C<sup>3</sup>も考慮に入れると、C<sup>1</sup>:royaume dely, C<sup>2</sup>:royaume de ely, C<sup>3</sup>:royaume deoly<エリ王国>のような例が目には止まらずにはいない。最後の二つは、C<sup>1</sup>とは異なる一つの似通ったモデルを考えさす。C<sup>1</sup>では si dirent que il porroient bien demorer dore en avant por retorner とあるところで、C<sup>2</sup>と C<sup>3</sup>は正しい読み demourer trop<余りに遅くなる>を有している。ともあれ、直接 C<sup>3</sup>に基づいたのではないにしても、C<sup>2</sup>はそれとほとんど同じテキストをモデルとしている。コピーとしては、あらゆる点で最悪である。全てが非知性的な性急さを示している。例えば f.68 に「グラン・カアンが国民になす善行について。また本当にご存じありがたいが君主は、国民が困窮していないか知るた

めに自分の全領土で使者が通行する主な街道全てに・・を命じた」とある。第 XCVIII 章を写し始めたのだが、次の章がほぼ同じように始まる（「またご存じありたいが大君は」）ものだから、sire<君主>の後次の章に飛び、ほとんどすぐ後のやはり共通する別の 2 語 *ses messages*<自分の使者>にまたもや勘違いして、すぐ前の章に戻っている。さらにもう一例で十分であろう：C<sup>1</sup>「数種のオウムがおり、*touz blans come nois*<我々ののように真っ白で>、嘴と足は赤い。Et si en y a aussi de vermaz et de blans<また赤と白のもおり>、この世で最も美しい見ものである」、C<sup>2</sup>「数種のオウムがおり、*tous blancz comme noirs*<黒いように真っ白で>、嘴と足は赤い。Et blancz<また白く>、この世で最も美しい見ものである」。

C<sup>3</sup>は、これも私には C<sup>1</sup>の直接のコピーとは見えないが、その異なりはそれに何らかの自立性、いかなる補完的な価値を与えるほどでもない。より新しいスタイルで書き直された C<sup>1</sup>であり、ちょっとした削除がより多くあり、時に控え目な拡大がいくつかと、とりわけ多くのしばしば奇妙極まりない勘違いがある。そのことは、何よりも後世の写字生にとって分かりづらいものとなった典拠の古さを証している。その特徴を示すには、とんでもない誤りのいくつかで十分であろう（C<sup>3</sup> - C<sup>1</sup>の順）：

I 22:*extraire*<引き出す> - *retraire*<書き記す> XV  
14:*servi devant tous*<皆の前で仕えられた> - *servi et honorez de toz*<皆から仕えられ誉れ高く遇された> LXI 8-9:*par costes les montaignes*<山の中腹に> - *par tote les montaignes*<山全体に> LXIX 4:<他の何人かと彼の前にいた者> - <彼の前にいた他の 5 人のうちの何人か> LXXVII 11-2:<彼は常に軍事の子供だった> - <彼は常に軍事に携わっていた> LXXXIII 2:<彼の 4 人の妻の長男は 12 人の男児がある> - <グラン・カアンは 4 人の妻から 22 人の男児をもうけた> LXXXIX 1-2:*au bout de l'an*<年の終りに> - *au chief de l'an*<年の始めに> XCVII 6:*noyers*<胡桃の木> - *mouriers*<桑の木> CVI 17:*cousture*

<継ぎ目> - colone <柱> CXXI 32: <十字型の 2、3 の切れ目  
> - <2、3 の刻み目をつける> CXXIV 21: vertueusement <徳  
高く> - fierment <激しく> CXL 5-6: <彼は美女を抱えて快  
楽を果たすこと以外関心がなかった> - <女性のことと貧民に慈善  
を施すこと以外> CLXXVIII 59: <この夜の飲み物を子供の時  
から用いる> - <これを子供の時から用い始める> [以下略]

C<sup>1</sup>、あるいは別の言葉でいうと、その中に最も完全で純粋な表現を宿しているグループは、研究者によって余りにも好意的に評価された。L.ドリズルは、「このテキストの基盤は書き直しと削除を被った」ことを認めるが、「その手直しと削除は、写本 5631 と 2810 におけるよりずっとささいなものである」と付け加える。実際は、他のグループに対する C の特色は、ポーロの書がまさしく削除と要約を通じて一貫して大規模な縮約を被っていることにある。様々な文章において必ずしも厳しく必要でない各要素が捨てられているのみならず、さらにまた解説的な意見、要約的な個所、注釈と場面移行の語句がことごとく消え去っているのみでなく、重要な事実や細部が切り捨てられており、FG の他の稿本と系統的に対校すれば、かなり目立った偶然でない欠落が極めて数多いことが分かる。内容のこのひどい貧しさは、そのモデルがこの家族の原本に近いことと、短くするという必要が写字生に課した大きな合理性によって償われている。分かりにくいというだけで余りにも多くのことが写字生によってあっさり切り捨てられている。しかしいくつかの個所は保存され、その原初の正確さの中に残っている。我々がすでに見、また他の多くの例で確認したごとく、その中にはっきりと B と対立するいくつかの崩れ——D・A と共通する——がある一方、D・A から離れて B と一致する場合も少なくはない。しかしその価値を誇張してはならない。同じ系の双子であるが、より長い一連の中間写本を経ている A と D は、言語的観点からは疑いもなく保守性において劣り、極めて頻繁により崩れているが、本質的により揃っている。C にもまた、これを用いようとする者に最大の慎重さを課す、嘆かわ

しい変形が欠けてはいないし、それらはもっぱら C 独自のものである。(単に F と対校したのではその誤りを説明するに十分でないときは、訂正を括弧内に記す<sup>10\*</sup>)。

IX 6:Et quant li III mesaige furent bien a acre 「3人の使者がちょうどアークルにいたとき」(F:Et quant meisser Nicolau et messer Mafeu et l'autre mesajes furent bien aparelies 「ニコロ殿とマフェオ殿ともう一人の使者の支度がすっかり整うと」) XLVII 34 「貴頭の男性は錦をまとう」(F 「上流や貴頭の女性はズボンをはく」) LXVII 8 「7日来させる」(F 「ある日チンギス・カンは来させた」) LXXV 37-8 「彼と共に勝利したため、かつてグラン・カンアンがその王を賞讃した一民族以外」(F 「かつて彼と共に勝ち取った勝利ゆえに、チンギス・カンがこの誉れを授ける」) LXXXV 27 「かくて一つの門から別の門へ真っ直ぐに進む」(F 「どの門も他の門と真正面に相對している」) XCIII 7 「これら1万人のそれぞれが2匹かそれ以上の犬を持っている」(F 「これら1万のうち2千人がそれぞれ大きなマスティフ犬を持っている」) XCIV 27 「全軍の最も高いところにいつも鷹がいる」(F 「全軍の最も高いところでいつも自分の旗を立てている」) XCVI 17 「少なくとも自分の体を使う者が2万人以上いる」(F 「金のために男に全てをまかせる者が2万人もいる」) *ibid.* 17 「次にこの都市で君主が有している権力のことを述べよう」(F 「次に二つのこと、造幣局とこの都市で造られる貨幣について述べよう」) CXXV 14 「インドの島である」(F 「インドとの境界にある」) CLXVIII 5 「また言うておくが、北極星も我々がポヌモワールの星と呼ぶ北西の星も」(F 「また言うておくが、北極星は小さくも大きくも姿を見せない」) CLXXVII 45 「ある場所に」(F 「ヌビアに」) CLXXX 16 「また別のやり方を持っている」(F 「彼らの母親はまだ生存している」) CXCVIII 54 「インドには馬なしでいくことのできる 12,800 の島がある」(F 「インド海には人の住む住まぬ合わせて 12,700 の島がある」) [以下略]

次の二つの興味深い発展もこのテキストだけのものである。もち

ろん写字生の空想によるものであるが、この版が作られたときの簡潔さと真面目さという基準にけっこう反している。

LIX 23「君主はこの国の女性の大多数を御前に呼び寄せ、この風習がさらに続くことを望むかどうか尋ねた。すると彼女らは、自分たちの良き習慣を失うくらいなら死ぬほうがましだと答えた。で、そのため男たちは大いに喜んだ」<sup>11\*</sup>

XCVII 48「この大君の下にある大なる力と大なる国々のことを十分に考えられる者にとっては、それを信じ理解するのは容易なことであろうが、そこに行ったことがなく世界の様々な事物を目にしたことのない者にとっては、知らないことを理解するのはやはり無理であり、信じるのは困難である」(F:「グラン・カアンの紙幣」についての章で、「もう一つ大変なことを皆さんに言うておこう。この世の君主を全て合わせてもこの大君が有しているほどの富は持っていないのですぞ」)<sup>12\*</sup>

Dの中に混交テキスト、つまりCとAの影響が見られていたことはすでに述べた。しかし、そうした解釈は根拠をもたない。Dが、それに比べて内容的にはるかに少なくなっているCから由来することはありえない。モノとしてそれより古いからAからということもありえない。もちろんFGとA<sup>1</sup>を直接つなぐものを主軸と見なすならば、それに対するDの位置を定めるのは簡単ではない。次の両方と否定しがたい似かよいをもってはいるが、CにもAにも含めることはできない。しかし、D・Cの一致が特殊な関係の証拠となるためには、その点でAが、常にそうであるように、C・D・Aのグループ特有の後代の崩れた読みではなく、そのグループの純粋な読みを提供することが必要であろう。一方AとDの間には、Aの原本とDにとって共通のオリジナルを設定することが許されるような対応がある。章の数は同じであり、見出しもほぼよく似ている。Cにはない共通の欠落がある(例えばLVI 5-6「コートンからペムまでも沙漠である」を欠く)。特徴的な共通の誤りがたくさんある(<家畜で vivoient 生計を立てる>が venoient<来る>、<トルコマン人の

province 地方>が quantite<数>、chault lieu<暑い所>が haut lieu<高い所>、asnes sauvaiges<野生のロバ>が oes sauvaignes<野生のガチョウ>、ost<西>が est<東>、les fait dormir avec eles en un lit<一つのベッドに彼女らと一緒に寝かせる>が les fait dormir en son lit<自分のベッドに寝かせる>、等)。Dは、Aより古く多くの個所でより保守的で正確だが、全体としてこれに劣る。Aに対してはCと同じ関係にある。つまりこれまた、より小規模でだが自由で個人的なコピーで、見落としが頻繁で、削除と要約を欠かない。ごくまれにだが、Cでと同じようにこのグループの間違った読みがいくつか訂正されている。例えば、「最初に voient<見る>ものをその日崇拜する」と正しく書いているのは、C・D・Aグループの中でこれだけである。

グレゴワールの改作から生まれた様々な稿本は二つに大別されることはすでに述べた。我々が今取り組んでいる2番目のグループでは、正確を期すためにCとDの特殊な個性を区別し、その結果それらに特別の名前を与えなければならなかったが、これらがこのグループの他の写本と緊密に結びついていること、それに共通のテキストの転記であり、そのテキストはそれはA<sup>1</sup>・A<sup>2</sup>・A<sup>3</sup>によってより機械的・忠実に、かつより完全に今に伝えられていることを忘れてはならない。

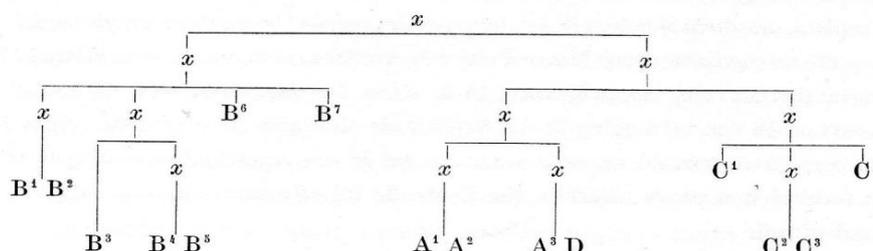
A<sup>3</sup>とDは同一のモデルから来るにちがいない。A<sup>3</sup>がDと共有するのは、A<sup>3</sup>をA<sup>1</sup>・A<sup>2</sup>の兄弟としている類似と比べればわずかなものであるが、共通の典拠を確信さすに十分である。別の言葉で言うと、Dの異読のいくつかは、Dが由来するコピーにすでに遡るにちがいないが、しかしその性質と数は、そのコピー自体と他にあるかもしれないその派生本に、伝統的な読みのけっこう忠実な再生であることを妨げないようなものである。すなわち、固有名詞の崩れはA<sup>3</sup>とDではしばしば同じである。原本の疑わしい言葉を同じように変える：「またこの橋の上には君主の税金が徴収されるグラン・カアンの certaine maison<ある建物>がある」(Pauth. P.369:le

couvert<屋根>、F:comerque<税関>)。このグループの読みを同じように変える：「これを ne le beniront<祝福せぬ>者は皆死ぬであろう」(Pauth. p.255:ne l'obeiront<従わぬ>、F:idem)。誤りを同じようにさらに悪化させる：comperes<異なっている>を comparez<似ている>(Pauth. p.76:comperes, F:devise<異なっている>)。ともに同じ誤解がある：「これから私がお話する3日行程 en<で>」(Pauth. p.62:a<のところに>、F:trois jornee plus avant<3日行程先に>)。結構古い稿本の新しいコピーであり(いくつかの誤りが明らかに示すごとく)、ある点で A<sup>1</sup>・A<sup>2</sup>より完全であり、テキストの歴史のために何らかの興味はあるが、この写本はしかしながら内的な価値はほとんどゼロである。コピーには馬鹿げた点が散在している。地名や技術的な個所は好んで避けられている。物質的な自立性は、短縮と削除においてこれを結構簡潔なものとしており、追加はほとんどなく、文体的改新という最初の計画に余り忠実でないが、いくつかの大きな欠落の原因となっている。<sup>33)</sup>

A<sup>1</sup>・A<sup>2</sup>については、ポーチェの出版とそれに対する批判によってなされた正しい指摘のおかげで、簡単にすませることができる。これらが同一のコピーから派生することは疑いない。その似かよいは、モノとしてより新しい A<sup>2</sup>が、A<sup>1</sup>が欠落している一箇所以上で揃っていなければ、A<sup>1</sup>の単なるコピーと考えてもよいほどである<sup>34)</sup>。以上から、このどちらかに対するポーチェの気ままな好みに常に従わなくともよいことは明らかである。同じグループの他の写本と対照することによって、これら二つの一つがいつまたなぜ新しくなったかが示される一方、問題を真に本質的なもの、すなわちこれらが属するグループの、Bに対する評価へ導くことが可能になる。<sup>35)</sup>

以上駆け足で行ってきたこの検討の結果を、というよりそこから得られた推定をより簡潔にまとめるために、それを系統図に要約する。ただし未知のものについては、最小限必要と思えるものだけを記すが、今日失われた中間写本はさらに数多いことも排除できない。

Fig.8 FG 系統樹



## 6. このグループの全体的結論

FG の研究は、どうしても晴らさなければならない有害な思い違いが今なおポーロ研究に垂れ込めているのでなければ、無益な知的遊戯であろう<sup>36)</sup>。すなわち、FG は F が [直接] 見直され訂正され [てでき] たものではないということを証明する唯一の方法は、F<sup>1</sup> がどうであったか、そしてそれに対してかの改作者がどのように振舞ったかを可能な限りはっきりさせることである。

F と F<sup>1</sup> が共通の誤りをいくつか有していたことは疑いない (XXX 13:tauriz<タブリーズ>は TA から taurizins<タブリーズ人>と訂正できる ; LXIX 35:les plaines desote<荒野>は F 自身の CCXVIII 19-20 からして d'estee<夏の>であろう<sup>37)</sup> ; CLIV 23:quindici milioni<15 百万>は quattordici<14> ; CLXXIX 82:Adam<アダム>は Borcam<ボルカン>[釈迦]、等)。どちらもいくつか特徴的な欠落がある (X 5:教皇の名が空白になっている。LXX 38-9:モンゴルの軍隊組織に関する用語が欠落している。LXXXVI 49-50:VA には残っている句の断片が飛ばされている。CCII 29:TA には見られるプマールの王の名が空白になっている<sup>38)</sup>、等)。F では enperaices<皇后>(cfr.LXXXII)を eporaices と誤っており、グレゴワールにより近いグループの一つ、すなわち B には esporaces とある。

F で明らかに崩れている多くの個所は、FG に探しても見当たらないか、あるいは大きく短縮されている。グレゴワールが前にしていたものにも F のとおりにあったのだが、その困難を解決できずして削除する方を選んだと疑っても何ら不当ではない。コカチン姫とともにアルゴンのもとに送られたマンジ王の娘についての長い個所 (XIX 33-52) は、ポーチェによれば、マルコ・ポーロが必ずや「余りにも個人的だとして削除した」個所であるが、それよりはおそらく、突然——私が間違っていなければ——最初一人だけだった花嫁を二人に置き換えれば、読む者に混乱をきたすことを危惧したからにちがいない。たくさんの明らかに誤っている表現を御覧になりたい。それらを、最後の写字生である私自身が、テキストの中で何らかの形でそれに換えて脚注に訂正しなければならなかったし、もしマルコ・ポーロが校訂者であったなら、もちろん彼も元の正しい形を与えることをせずにはおこなったであろう：XXVI 6, XXXI 6, XLIII 15-8, XLVI 14, 16-7, LXX 67, LXXIV 15-6, CXIV 9, CXVIII 18 etc. グレゴワールはこれらを見事に削ってしまった。彼が敢えて訂正しようとした点もいくつかある（例えば XLI の注参照）が、彼の訂正は余りにも自明なものであり、彼が用いた写本が今に伝わる他の写本よりいいものではなかったということの更なる証明を提供しているだけである。

もちろん、F と FG との異なりを全て F<sup>1</sup> と F との違いと見なすことはできない。グレゴワールが誤解したかあるいは勝手に変えたかしたことはありえないどころでないからである。グレゴワールが、もし理解したならば F と同じ読みを与えたにちがいないと思われるケースは、私には数多いと思える。例えば以下を見られたい (FG - F の順)：XXV 3:le siege du pape des crestiens <キリスト教徒の教皇の座> - les cies de tous les cristiens <全キリスト教徒の長> ; XXV 26:le te vueil donner a mengier sicomme le tien meismes <汝自身が持っているようにそれを汝に与えて食べさせよう> - le te voi doner a mangere le tien meesme <その汝のものを汝に与

えて食べさせよう > ; XXXV 11:coustes (B1・B2:coletes, D:keutes)  
 – coltres<カヴァー> ; XXXVII 22:cestours – ce sont toin<すな  
 わちマグロ> ; XLVII 3:si regnent<統治する> – se roit<王位に  
 就く> ; C 5:tempeste<嵐> – grillis<イナゴ> ; CLIII  
 41:instrumens<器具> – tailloures<テーブルクロス> ; CLXXV  
 78:enfans<子供> – feoilz<忠臣> ; id. 108:charrete(C:chartre)  
 <車> – caiere<椅子> ; id. 127:suif<脂> – oisci<糞> ; id.  
 166:estourni (estournal)<ムクドリ> – estornu<くしゃみ> ;  
 CLXXVIII 67:les os du buef<牛骨> – le oisi dou buef<牛糞> ;  
 id. 102:parfais ydolatres<完全な偶像崇拜者> – perfidi ydres<  
 邪悪な偶像> ; CLXXII 7:si y a moult granz palus et granz  
 plantains a mervoille<びっくりするほど沢山の沼と大木がある  
 > – il hi a gat paul si devises que ce estoit mervoille<びっくり  
 するほど様々な猿がいる> ; CLXXXII 7:giroffes<アラセイトウ>  
 – giraffe<キリン> ; CXCII 18, CXCI 13, CXCIV 91:ours<熊>  
 – lonces<山猫>。このフランス人改作者にとって、自分の原典の  
 フランク・イタリア語が往々にしてなんとも解し難いものだったこ  
 とは明らかである。例えば XL 10:ricci<金持ち>のようなはっきり  
 としたトスカナ語をいくつか訳していないことは、その意味を追求  
 しなかったことを示しているように私には思える<sup>39)</sup>。そうした言葉  
 をそのまま残したのと同じ理由で、他の余りにもイタリア語的な用  
 語をおそらく避けたのであろう：例えば pat(=patto<条約> CLXI  
 29), quaie(=quaglia<鶉> CLXXV 174), aspre(ジェノヴァ銀貨  
 CXI 8)。F と照らし合わせると、FG のいくつかの文ははっきりと  
 誤った解釈であることが分かる：XVI 5:sot de IIII lettres de leur  
 escritures<彼らの書き方の四つの文字で> ; XLVII 34:les grans  
 dames et les gentilz hommes<上流の婦人と貴族の男たち> ; <  
 我々は同じような暦をもっている> ; <外も内も全て緑である> ;  
 <彼らのお金は金でできている>——<金が彼らのお金である>  
 (つまり鑄造貨幣ではないこと、この違いは大切である) ; <この都

市の市民とそこに住む者全て>。いくつかの間違ひは単に読み誤りによるものである: reobar les<レオバル、その[果物]>が reobarles<レオバルレ>; poil<毛>が pie<足>; aler desout<下痢をする>が aler de route<道をたどる>; feutres<フェルト>が(明らかに funes<綱>と読まれて) cordes<綱>; uies<慣習>が vies<暮らし>; di XXII jors<22日の>が dix ou douze jours<10日か12日>; lairons<盗賊>が barons<封臣>; coulombes de fust de pieces<香料の木の柱>が collonnes de leign d'espices<木の柱や[虎の皮の]断片>; comerque<税関>が couvert/comiert<覆い>; en la souce de l'aille<ニンニクのソースに>が en souc que il font d'yaue chaud et d'espices<熱湯と香料で作るソースに>;<布を裁断したり塗ったりするための裁断工や縫製工の ne a mester 仕事はない>が n'a mestre<親方はいない>。

全体としては今我々のもとにあるテキストと同じであるが、F<sup>1</sup>はその固有の特徴をもっていた。

FGが呈する全ての欠落について、それが改作者かそれともF<sup>1</sup>の写字生に帰されるべきか、絶対的な形で決定することはもちろんできないが、F<sup>1</sup>にいくつか特殊な欠落のあることは、グレゴワールのいくつかの明らかな誤りを説明しようとするとき、どうしても我々が拠らざるを得ない前提である。FのIV 12:「二人の兄弟は彼に、elle soit chouse que il le peusent fair<それは自分たちにできることだ>から、喜んで信用すると言った」は、FGでは「自分たちに言われていることを喜んで信用するであろうと答えた」となっている。これはおそらく、F<sup>1</sup>ではイタリック体[< >内]の語句がすでに欠けていたのであろう。FのCLXXVII「それは il ne naiscent<生まれたとき>よりはるかに黒くさせる」は、FGでは「かくて悪魔のように黒くなる」となっているが、その国民のもとでは悪魔は「雪のように白い」と記されていることからして、この文脈では考えられない表現であり、イタリック体の言葉が抜け落ちたことでもって説明がつく。また、FのCLXXVIII 25-6「何らかの商品を商う

必要が生じると、それを買いたい者は *en estant* <すぐに> 起きる」  
に対して、FG では <朝服を着るとき> とある。これは、*en estant*  
が抜け落ちたと考えるだけで十分な奇妙な誤りである。

一方、コピーとして  $F^1$  がけっして  $F$  に劣っていなかったにちがいないことを納得するには、我々のテキストにざっと目を通すだけで十分であり、FG はこれに正確な読みと確かな補いを結構頻繁に提供してくれている。個々の訂正は、 $F$  では欠落していたり間違っているいくつかの個所で、より大きな忠実さと完全さでもって償われている。<sup>40)</sup>

もし  $F^1$  の厳密で正確な転記であれば  $F$  の貴重な補完となったことであろうし、これらの写本から復元できる改作版にも、その改変にもかかわらずある種の価値が残っている。しかしながら、実際には我々は改作された一コピーを前にしていることを忘れてはならない。新しい転記とそのモデルとの差を正確に測ることはできないのだから、かの正体の分からない転記者のものであるものをマルコに帰せしめないよう最大の注意を払わなければならない。例えば、以下の  $F$  の文をポーチェの対応個所と対照されたい：IX 10-11, 14-15, XVIII 21-2, XXV 32, XXIX 11-3, LII 20-6, LXV 26, 33, 59-60, LXXIX 33-6, LXXX 10, CVIII 12, CIX 5, CXVI 17-8, 48-9, CXX 44, CXXI 58, 60, 67-8, CXXIV 21, 40, CXXXV 30, CXL 54, 67, CXLII 24, CLIII 41, CLXXVI 34, CXCVIII 14。FG のより分析的でより普及した文の中に、オリジナルの読みか単なる文体的拡張か、どちらを見るべきであろうか。バグダードやサマルカンドの奇跡を語るなかで、 $F$  にはない細部を記したのはルスティケッロだったか、それともグレゴワールか。問題は解決不可能であり、これらの点でグレゴワールが他のどのテキストによっても裏付けられていないからといって、それを決定するに十分ではない。もちろんグレゴワールは自分のモデルに対して何ら盲目的崇拝はもっていないし、それをよくしようという危険な幻想が結構透けて見える<sup>41)</sup>。すでに述べたごとく、全体として結構忠実ではあるが、その忠実さの結構様々な

程度の気まぐれをほしいままにしている。移し変え、端折り、削り取り、しかも時に著しい。二度編まれたという説を信じるなら、また我々の目にとっても FG が「自分の部屋で、牢獄では得られない自由でもってなされた、最初のジェノヴァでの書き下ろしの落ち着いた再編集、科学的にも文体的にもかの旅人の最後の思想を表す改訂版」と見えるなら、これらの異なりも注目に値するであろう。しかしまさしくこれらが、我々が闘っている説に反対する最も強力な論拠の一つなのである。ポーチェ自身、FG にないことが説明しにくいいくつかの個所の重要性に気づいていた。F の第 CLXXIX 章 29-42 行が FG に見当たらないことに驚いているが、それは仏陀の話がそのドラマチックさと美しさを保つためには真に枢要な部分なのである。<sup>42)</sup>

もっとも、ポーロのオリジナルの復元にとってその作品の内的な価値がどうであろうと、グレゴワールは敬意と榮譽をもって記憶されるに値する。我々が旅人の書がアルプスの向こうですぐに結構広範な成功を得たとすれば、それは彼のおかげだからである。他の特殊な版はマルコの作品を教養人と民衆のもとで生きづかせた。グレゴワールの版は貴顕や君主といったエリートに受け入れられたのだった。美しい物語のように愛された。この家族の稿本は、モノとして最も美しい部類に属する。これらの大部分に美しく描かれている細密画のことを考えるとき、戯画的・空想的な題材の傍ら、波乱にとんだ航海やはるかな冒険の意味がその中にいかに表現されているか観察するのは興味深いことである。

#### 【註】

1 \*. Cap. II : Il rimaneggiamento di Grégoire (FG), pp. XXXIV-LXXIX. 『大阪国際大学紀要』16-2, 2003, pp.251-71, 同 17-1, 2003, pp.163-81 より転載。原典からの語句および文の引用には、適宜原文とその和訳もしくはその一方を付けた。引用例を省略した場合は、「以下略」等と記した。原註は大幅に

省略・要約した。〈 〉内は引用文中イタリック体の個所。[ ]内は訳者補足。\*は訳註。ローマ数字は上記ベネデット校訂版 F の章、アラビア数字は同行(es. XVII 3-5)。

(原註)

1. これらのうち A<sup>3</sup>・B<sup>5</sup>・B<sup>6</sup>・B<sup>7</sup>の四つは、コルディエ・ユールのリストに挙がっていない。
2. f.1rには今も1682年のカタログの番号10260がある。
3. この書き出しを転記した際ポーチェ(p.3, n.1)は、contrefais<作り直す>をcontrescris<書き直す>に変えている。
4. 旧番号: 8392(Omont, IV, 83), 42(III, 5), 81(II, 469).
5. 同写本の265の細密画の複製へのH. Omontの序文参照: *Reproductions de manuscrits et miniatures de la Bibl. Nationale*, fasc. XII, 1907, pp.1-6.
6. この稿本は次の書で美術の観点から検討されている: A. De Champeaux – P. Gauchery, *Les travaux d'art exécutés pour Lean de France duc de Berry avec une étude bibliographique sur les artistes employés par ce prince*, Paris 1894, pp.153-4.
7. 旧 Hist. 8145 B.
8. この興味深い女性については: Max. De Montmorand, *Anne de Granville, sa vie, son oeuvre, sa postérité*, Parigi 1917.
9. Louis Malet de Graville; cfr. Anselme, *Hist. Généalogique et chronologique de la maison royale de France*, t. VII, pp.865-6.
10. Cfr. F. G. Warner – J. P. Gilson, *Catalogue of western manuscripts in the Old Royal and King's collection*, t. VII, 1921, pp.339-41.
11. Cfr. F. Madan – H.H.E. Craster, *A summary Catalogue of western manuscripts in the Bodleian library at Oxford*, t. II, part 1a, 1922, pp.381-2.
12. Cfr. J.R. Sinner, *Catalogus codicum manuscritorum bibliothecae bernensis*, t. II, Berna 1770, pp.419 sgg..
13. この文章に施すべき訂正ならびにこれの歴史的価値については、本章第

5 節で述べる。G. Bianconi, *Degli scritti di Marco Polo e dell'uccello <Ruc> da lui menzionato*, Bologna 1862, p.27 は、このベルンの写本を 1307 年のものと誤っている。

14. これの存在を知ったのは下記より : J. Senebier, *Catalogue raisonné des manuscrits conservés dans la Bibliothèque de la Ville et République de Genève*, Ginevra 1779, p.395.

15. L. Delisle, *Inventaire alphabétique des manuscrits latin et français ajoutés au fonds des nouvelles acquisitions pendant les années 1875-1891*, t. I, p.392.

16. 旧 H. F. 675。新旧両番号が記されているため、Cordier-Yule, II, 537-8 では 2 本 (n.21 と 23) に数えられている。

17. E. Muret, *Un fragment de Marco Polo*, in 《*Romania*》, XXX, 1901, pp.409-414.

18. Cfr. J. M. Richard, *Une petite nièce de Sain Louis, Mahaut comtesse d'artois et de Bourgogne (1302-1309)*, Parigi 1887.

19. 「教皇の下に派遣されたタルタル人の使者について」と題してマルコに言及されている箇所は引用に値する (cfr. Martène et Durand, *Thes. nov. anecdot.*, III, 746 sgg.). [訳注 : 旅行記中の、ニコロとマフェオがクビライから教皇のもとに派遣され、マルコを伴って再びそのもとに至った経緯を述べる箇所が (ラテン語) 引用されているが、略する。人名の綴りが注目される : Cobilaazan, Alahonis, Chaam, Catagal, Bendocheur 等]

20. この綴り Chépoy は、Chevalier, *Répertoire des sources historiques du Moyent-Âge – Topo-bibliographie*, より。

21. 原文は 3 写本とも lui desiderans とあるが、私には受け容れ難く、lui は bñ(bien)を読み誤ったものであろう。

22. J. Petit, *Un capitaine du règne de Philippe le Bel, Thibaut de Chepoy*, in 《*Le Moyen âge*》, 1897, X, pp.224-39.

23. 1850 年 10 月 25 日のアカデミー講演 : *Nouvelles recherches sur les premières rédactions des voyages de M. Polo*, pp.11-12 (抜粋)。

24. Bianconi の最初の批判は、《*Études religieuses historiques et*

littéraires par des PP. de la Compagnie de Jésus», N. S. VIII, 1866, pp.394-403 の C. Cahier の論文中に公開書簡の形で発表された。それに対する Pauthier の反論は、《Annales de philosophie chrétienne》, febr. 1866, pp.16-51。それに対する Bianconi の再批判は、《Memorie dell'Accademia delle scienze dell'Istituto di Bologna》, 2a serie, t.II, 1868。

25. ポーチェには、テキストの信頼性をその言語の正しさから測ろうとする固定観念があり（「文献学者でもない—近代人にも読める」）、ビアンコーニに対して、これはフランス語のテキストだからイタリア人で自然科学の教授である者は審判としてふさわしくないと言う。

26. Langlois, *art. cit.*, pp.256-7.

27. Bianconi はこの正体不明の改作者について、「この仕事をなした者は、無能ではないし単なる書家でもなさそうだ」（p.27）。私も‘聖職者’だと思うが、1300年代初頭の多数の‘故グレゴリウス’の中から特定することは不可能である。

28. 三つの稿本のどれに従ったか、また A<sup>1</sup>の読みでなく他の読みを採った場合その理由は何か、必ずしも常に示されていない。A<sup>1</sup>にありながら捨てざるを得なかったヴァリエントについて、あまりにも口をつぐんでいる。自分がその優越性を認めたい稿本の、時として極めて重大な欠陥を無意識に隠したかったがためであろう。[引用例略]

29. Delisle, *Bibliothèque de l'École des Chartes*, 1882, p.235

30. G. Raynaud, in *Romania*, XI, pp.429-30; *Publications de la Société de l'Orient latin, Serie geografiva*, III, pp.213-26.

31. FG の優越性に対するその盲目的な信頼にもかかわらずポーチェは、結構何度も自分のテキストの検証に F を引く必要を感じている (pp.127, 149, 421, 449, 498 ecc.)。P.721 では自分の写本の欠落の穴埋めに、p.305 では訂正に F を用いざるを得なくなっている。

32. 今まで何故 B<sup>3</sup> が B<sup>4</sup> の単なるコピーと考えられたのか、私には分からない : cfr. Yule, *op. cit.*, II, 547, Langlois, *art. cit.*, pp.251, 253.

33. 例えば、ポーチェの p.448 l.13 から p.550 l.1 に飛ぶ。

34. A<sup>1</sup> と A<sup>2</sup> が共有する書き間違いと、同グループの伝統から離れる誤りの

数は著しいし、ポーチェの刊本に見えるよりも数多い。

35. ポーチェのテキストからは分からないゆえ、A<sup>1</sup>の番号付けのひどい混乱を指摘しておきたい。最初の140章は、番号はテキスト中では正確だが最初の目次では頻繁に間違っており、双方でほとんど常に食い違っている。第XCL章の最初の数行で二番目の写字生に代わっており、おそらくテキストと目次の間の番号のズレに気づいたのであろう、次の章に本来の番号CXLIではなく、目次の誤った番号CXXXVIIを振っている。その後欠落があり、CXLVIへと飛ぶ。

36. ポーチェのテキストが危険な妨げであり続けていることは、J. H. Charignon, *Le livre de Marco Polo etc.*, Pechino 1924-6中にそれが近代語で再版されたことによって明らかであろう。

37. 熟考の末、私自身のテキストに施した訂正を撤回し、博識な読者の赦しを請う。[訳注：ベネデットのテキスト注には「desoreをdette di sopra<上述の>ととる。V:de instade<夏の>、しかし1.23と矛盾する」(p.54)とある]

38. 自分のテキストに目がくらんで、ポーチェはこのことにもマルコによる‘改訂’の証拠を見る(p.729)。

39. これ[ricci<いが>]に対するポーチェの注は奇抜である：「大きな頭巾様の鞆の形をした果物の産物」。

40. これ[lairons<盗人>]に対してもポーチェ(pp/275-8)は、FGの読み[barons<封臣>]を唯一可能なものとして熱心に主張している。

41. 繰り返すが、改訂、ましてやマルコ・ポーロによるその痕跡はない。

42. F: LV 8では、夫が20日以上に及ぶ旅に出ると妻は「夫が出発するとすぐ」別の男を取るとあるのに対して、グレゴワールは「その期間が過ぎると」と和らげる。F: CLXXIX 23では、仏陀の父は気晴らしをさせるために息子に3万人の娘を与えたとあるのに対して、グレゴワールには明らかに多すぎると思えたのであろう、「沢山の娘」と言うに止めている。

43. P.591. 同じく pp.250, 635, 685 etc.

(訳注)

2\*. *Le livre de Marco Polo*, par M. G. Pauthier, Paris 1865.

3\*. 以下にその 4 本の「書き出し」と今に残る記録の紹介があるが、省略する。

4\*. 以下 9 ページにわたってその転記が掲げられるが、省略する。内容的には、チベットの章から帰路の最後ホルムズの章までを断続的に要約したもの。

5\*. ティボー・ド・セポワがヴェネツィアに派遣されたのは 1305 年。翌年末同市と同盟を結ぶことに成功している。彼のフランスへの帰国の時期は詳らかでない。「ロマーニア」問題とは、かつて十字軍によって征服され(1204 年)その後ギリシア人によって奪回された(1261 年)コンスタンティノーブルおよびギリシア領土(ロマーニアと呼ばれた)の所有権と継承権をめぐる争い。

6\*. 本文中第 LXXVII 章「グラン・カアンとナヤンの戦いについて」(F. p.66)。

7\*. ローマ数字は以下全て、ベネデット自身の校訂になる F の章を指す。

8\*. 原文では対応する F の箇所は引かれていないが、ここでは括弧内に挙げる。

9\*. 以下の各項目で括弧内に挙げられている引用例は省略する。

10\*. 原著(カムール[ハミ]国の章)では、君主(モンケ・カアン)のもとに使者を派遣し、その風習の存続を願ったのは同地の男たち。

11\*. ベネデットのテキストでは *osci*<糞>(F. p.181)。

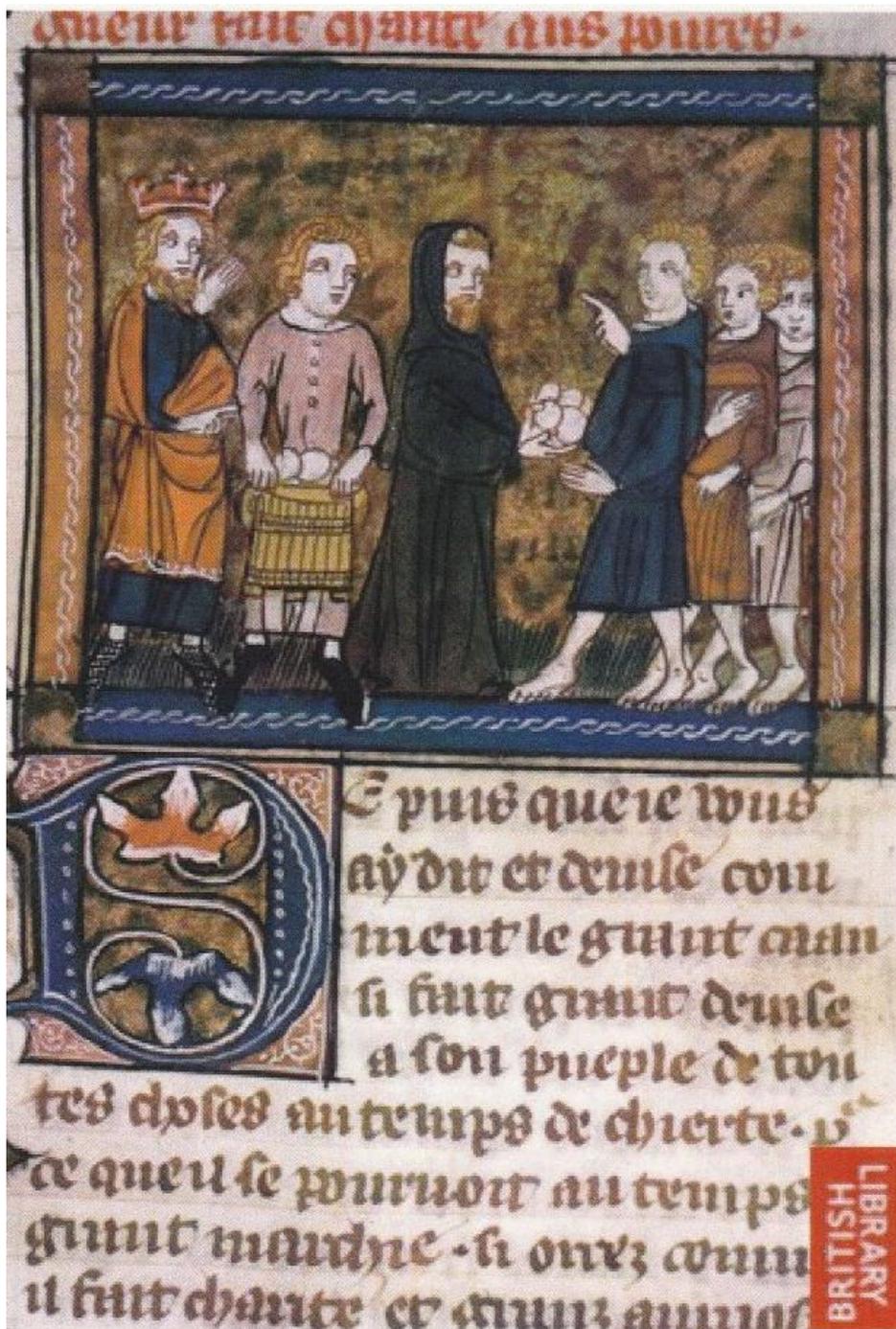


Fig.8 貧民に施しをするグラン・カン (Ch.104)

FB<sup>1</sup> : BL 19DI f.95r